



# 求道



★ 第八號

★ 第二卷

可認物便郵種三第 日六廿月二十年一卅治明  
(行發日一回一月每)行發日一月十年八卅治明

求道第貳卷第八號目次

求道

◎極樂無爲涅槃界

▲東溪君の遺簡

◎信仰上の活問題

講話

◎佛力無窮

近角常觀

◎自然の道義

近角常觀

實驗

◎信後の消息

無漏田 貢

◎佛境は不可思議也

近角常觀

雜錄

◎斷腸錄

近角常觀

歎咏

◎秋騒

左千夫

身まかりける友をしぬびて  
竹の里人の忌日に作れる歌

時報

◎遊行日記

近角常觀

◎求道學舎の消息◎求道の好期来る◎求道學舎、第一求道會講話題

毎日曜午前九時

求道學舎

(本郷森川町一帯地)

毎土曜午後二時

第一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

最終土曜午後七時

第三求道會

(日本橋區堀切町説教所)

求道

第貳卷第八號

極樂無爲涅槃界

明治三十八年八月三十一日某地の偵察に於て敵陣に中り微笑して西方に向ひ念佛三稱して往生の素懐を遂げし我從弟勇精院釋大歡師追悼の爲に謹て此一篇を捧げ奉る 常觀

吾人は佛陀願力の不可思議なるを鑽仰せり、吾人一人は此不可思議の願力に遇へば忽ち信樂開發の時來る。若し信樂開發し來らんか、凡聖逆勝皆大悲光明中に生活して、既に不退轉地に住し、身は有漏汚穢の肉體を脱せずして心は無漏清淨の樂土に遊ぶ、故に若し娑婆の緣盡きて永劫生死の苦を捨つるに至らむか、極樂無爲涅槃界の靈境に入りて快樂極りかなるべし、之を稱して眞實證と云ふ。『證卷』に曰く、煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば即時に大乘正定聚の數に入る、正定聚に住するか故に、必ず滅度に至る、必ず滅度に至れば即ち是れ常樂なり、常樂は即ち是れ畢竟寂滅なり、寂滅は即ち是れ無上涅槃なり、無上涅槃は即ち是れ無爲法身なり、無爲法身は即ち是れ實相なり、實相は即ち是れ法性なり、法性は即ち是れ眞如なり、眞如は即ち是れ一如なり、然れば彌陀如來如より來生して報應化種種の身を示現し玉ふ也と。嗚呼眞實證の靈境洵に思議すべからざる者、曇鸞大師讚して曰く

安樂聲聞菩薩衆。人天智慧咸洞達。身相莊嚴無殊異。但順他方故列名。顏容端政無可比。精微妙軀非人天。虛無之身無極體。是故頂禮平等力。

善導大師贊して曰、

西方寂靜無爲樂。畢竟逍遙離有無。大悲熏心遊法界。分身利物等無殊。或現神通而說法。或現相好入無餘。變現莊嚴隨意出。群生見者罪皆除。

歸去來魔郷不可停。曠劫來流轉。六道盡皆逕。到處無餘樂。唯聞愁嘆聲。畢此生平後。入彼涅槃域。

嗚呼極樂無爲涅槃界は人生有無の言説を離る。無明の暗夜忽ち無量の光明に照され、煩惱の黒雲晴れて法性の覺月速かに顯はれ、盡十方無碍の光明に一味なるの境、稱して滅度といふ、大患永く滅して四流を超度するの謂也、稱して常樂といふ、常住安樂の徳を顯はすもの、稱して畢竟寂滅といふ、宗教最後の平和なり、稱して無上涅槃といふ、佛教理想の極致也、稱して無爲法身といふ、佛陀悟入の境界也、稱して實相といふ、佛智如是の真相也、稱して法性といふ、境智冥合の本性也、稱して眞如といふ、眞實如常の眞諦也、稱して一如といふ、佛陀根本の都城也。而して此の如き種々の文字は皆此佛陀境界の無窮を各方面より説破せる者、要するに皆是極樂不可思議の境界たらずんばあらず。若し實相法性眞如を以て直ちに宇宙本體の謂也と解するが如きに至りては、彼樂土無窮の樂境を以て直ちに乾燥無味なる哲學上の假定となす者、慎まざるべからず、唯是れ佛陀至高の妙境界をあらはし給ふ所、如來淨華衆、正覺華中より化生する處、所謂蓮華藏世界の樂土たらずむばあらざる也。

此の如く蓮華藏世界に入りて眞如法性寂滅平等身を證するを得る所以のもの、抑々人世に在りて不可思議の名號を稱へ同じく眞如一實の寶海を満足するを以てなり。曇鸞法師曰く同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟たり、眷屬無量なり焉を思議すべけんやと、嗚呼吾人何等の幸か不可稱不可説不可思議の徳號を稱し、大慈大悲の大智海に融和することを得る。既に佛陀回向の名號を稱し、信樂開發の時來る、十方の衆生同一念佛海中に遊ぶもの、何人か佛陀の愛子

ならざるべき、誰の人か同胞兄弟にあらざらむ。假令百千萬里を隔つと雖、同一念佛の人は皆是同じく佛陀攝取の光明中に生息して大慈照護の慈懷に眠れるもの、此點に至りなば何ぞ階級の上下あらむ、何ぞ貴賤貧富の別を認めん。釋尊か四姓の區別を問はざりしも人間自覺の問題には人種の如何を認め給はざりし也、親鸞聖人が師弟信心の同一を主張し給ひしも、如來回向の信心は智慧才覺の多少淺深に依らざることを確信し給へば也。嗚呼不可思議の名號なる哉、一たび之を唱ふれば萬里も近きに在り、千歳も旦夕の如し、嗚呼不可思議の信心なる哉、一たび之を得れば萬人悉く兄弟にして、四海皆同胞たらざるなし。眞個に是れ絕對平等主義の根柢にして佛陀平等の大慈を人生の上に實現し給ふもの、慶ばしき哉吾人幸に此不可思議の徳號を稱し信樂開發し來りて踊躍大歡喜の境に住するを得たる、眞個に人生の上に兄弟の眞意義を實現すと謂つべし。若し不幸にして此平等

大慈の回向なかりせば人間何物か兄弟の眞義を解せむ、學を同じくする何かあらむ、居を同じくする何かあらむ、食を同じくする何かあらむ、財産を同じくする何かあらむ、血族を同じくする何かあらむ、皆悉く是れ虛假夢の如き者、唯獨り心を同じくするに至りて兄弟の眞義を實現する者、而も若し人間本來世俗の心を以てせむか、人心の異なるや其面の如し、強て之を同じからしむるも、眞個に會心の友たる能はず、たとひ之を清淨ならしめ、之を眞實たらしむるも皆是れ自力作善の信心にして千差萬別たらざるはなし。然るに今如來回向の信樂を開發して、口に大慈佛陀の名號を唱ふる者、眞個に是れ同心一體の兄弟にして共に如來矜哀の膝下に跪けるもの、此に至りて遠く山河を隔て、骨を異域に曝すと雖、恰も且暮膝を接して相語るが如く、幽冥界を殊にして、淨穢土を隔つと雖、共に無上の法味を味へるが如し。世間悉く是れ虛假、唯佛のみ是眞實、所謂煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごとたはごとまことあることなきに唯だ念佛のみぞまことにておはしますとは誠に同一念佛無別道故の四海兄弟の眞實を顯示し給ひしもの。嗚呼吾人何等の幸か信心歡喜此眞實の兄弟となる、此に於てや首を回らせば彼の學を同じくし、居を同じくし、食を同じくし、財産を同じくし、血族を同じくする者皆形已上、物質已上の意義を齎らし來りて、眞に永久不變なる者、生別によりて離るべからず、死別によりて隔つべからず、人生は是れ五十年乃至百年に過ぎずと雖、此世界終りて彼彼無爲の樂土に生し、此迷妄の夢醒めて彼本覺の都に歸る。是宗教最終の理想海なる者

此に至り絶對平等の本義を實現するの極にして、是極樂無爲涅槃界の樂境に非ずや、聖人曰く、大願清淨の報土には品位階次を云はず一念須臾の頃に速疾に無上眞道を超證すと言へるもの、同心一味の眞實證にあらすや。

抑々一味平等は佛教本來の根本義にして涅槃寂靜は實に其境界を顯はせるものならずんば、原始佛教に於て釋尊か菩提樹下に悟入したまひしは解脱の涅槃寂靜の平和にして又人をして、同一の實驗を爲さしめ其境に到らしめんとなめ給ひしもの、實に釋尊五十年の説教に非ずや。故に原始佛教に於ては阿羅漢は實に其境に達せるもの、釋尊も降魔成道せし曉は一箇の阿羅漢なり、五比丘も亦同じく阿羅漢なり、故に五比丘得道したる時は佛と共に世界六人の阿羅漢を生ずといへり、耶舍等の五人得道するに及びて佛と共に十二人の阿羅漢を生ずといへり、五十人の商人亦得道するに及び佛と共に六十一人の阿羅漢を生ずといへり。既に此の如く、原始佛教に於て佛陀と佛弟子は同一涅槃の實驗を爲し得る如く、大乘佛教に於ては亦何人も大涅槃の實驗を爲すことを得べし。此に於てや遂に一切衆生悉有佛性の教を生ずるに至る、而しては何人も佛陀の境界を實驗し得べしといへる一味平等主義をあらはせるもの、遂に親鸞聖人は猶一層其眞意義を實驗して曰く、一切衆生當に大慈大悲を得べきを以て一切衆生悉有佛性といふと、嗚呼吾人が大慈大悲の救濟を被るを得る所以のものは佛性を有するの謂にあらすや、故に又曰く一切の衆生當に大信心を得べきが故に一切衆生悉有佛性といふと。而して此大慈悲に接觸し大信心を獲得する、何人も被ることを得るの境にし、一味平等にして富貴に關せず、智識に關せず、唯よく信心歡喜するものは即ち佛陀の大慈悲を味へるもの也、故に曰く、信心よろこぶそのひとを、如來といふとときたまふ、大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なりとは、是吾人大乘佛教の眞髓を實驗し、悉有佛性の法味を享くる者、同一念佛の一道は一切衆生をして不斷煩惱得涅槃の境に入らしめたまふ也。然れども、釋尊菩提樹下の正覺は猶未だ有餘の涅槃にして眞實無餘の涅槃は跋提河畔の釋尊によりて示現せらる、一切衆生悉有佛性の大法は實に此時に於ける釋尊の遺訓なり、故に猶最後に進みて曰く、我たとひ涅槃に入ると雖、如來は常住にして變易あることなし、汝等弟子亦哀むことなかれと、遂に大般涅槃の眞實證を示したまひき、是畢竟寂滅、無上涅槃の靈境にして亦無爲法身、法性法身の如來なり。而して大慈悲に接觸して大歡喜を得たるの人命終るや亦此極樂無爲涅槃界に入

る故に曰く、如來すなはち涅槃なり、涅槃を佛性となづけたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりて證すべしと。嗚呼此境や吾人此界にありて想像すべからず、稱して淨土に生ずといふ、然れども無生の生なる者、又顔容端正の身體を證得するといふ、然れども、是虛無之身、無極之體なる者。眞個に二十九種の莊嚴鮮かにして、且つ吾人思議の境を超越するもの、安養といひ、安樂といひ、極樂といふ。而して大乘佛教の實相眞如一如なる者即ち此不可思議最高の靈境を顯はせし者、是跋提樹下の釋尊の入り給ひし境界たるのみならず、猶迦耶城の釋尊の來りたまひし境界なり。當に釋尊のみならず吾人をして大慈大悲を被らしめて大信心を起さしめたまふ誓願の根本、法藏比丘も亦此境より來りたまふ。況んや十方三世の諸佛皆此境より示現し給ふならざるはなし、故に曰く然れば彌陀如來如より來生して報應化種々の身を示現し給ふと。嗚呼眞個に是れ凡地にしてはさとられず、安養にいたりて證すべきの境、言語極まりて廣大思慮を絶し、仰嘆讚美して、唯靈感胸に溢るゝあるのみ。親鸞聖人唯信鈔文意に曰く、

極樂無爲涅槃界といふは極樂とまふすはかの安樂淨土なり、よろつたのしみつねにしてくるしみまじはらざるなり、かのかくには安養といへり、曇鸞和尚はほめたてまつりて安養とまふすとのたまへり、また論には蓮華藏世界ともいへり、無爲ともいへり、涅槃界といふは無明のまどひをひるがへして無上覺をさとするなり、界はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとするべし、涅槃とまふすに、その名無量なり、くはしくまふすにあたはず、ちろくその名をあらはすべし、涅槃をば滅度といふ、無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性と

可思議の四十八の大誓願をこしあらはしたまふなり、この誓願のなかに光明無量壽命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方無碍光如來となつてまつりたまへり、この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如來とまふすなり、すなはち阿彌陀如來とまふすなり、報といふはたねにむくひたるゆへなり、この報身より應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆへに、盡十方無碍光佛とまふす、ひかりの御かたちにて、いろもまします、かたちもまします、すなはち法性法身にまじりて、無明のやみをはらひ、惡業にまへられず、このゆへに無碍光とまふすなり、無碍は有情の惡業煩惱にまへられずとなり、しかれば阿彌陀佛は光明なり、光明は智慧のかたちなりとしるべし。

實に難有き文字にあらずや、深く味ふべき也、拜讀すべき也、感受すべき也、仰信すべき也、一點思索の念を挿むべからず。抑々佛陀は其靈境を悟らしめ、信ぜしめ、行ぜしめむが爲に法を説きたまふ、看よ三藏の中、經は佛陀自ら境界を直説したまへる者、律は佛陀自ら其境より來れる道徳を訓へたまへる者、而して論に至りては其境に引入せんが爲に論議説明したる者、多くは後世聖者の作る所、其目的たるや經に説くところの佛境を信ぜしめんが爲に印度當時の哲學論議の思想を用ゐて之を導きしもの、結局人をして不可思議の境界を信ぜしめんが爲也。然るに軌近佛教徒哲學の流行につれて、佛教本來の開悟信仰の意義を忘れ單に本體論、宇宙論の説明として徒らに思索問題に耽り、佛陀の境界たる實相眞如を以て、西洋哲學に於ける冷々たる本體と同一たらしむるのみならず、甚しきに至りては遂に佛陀如來をも哲學的本體に外ならずとする所以の者、畢竟拘々小智の凡夫思慮を以て不可思議の境を測度し得べしとの驕慢心より來れるにあらずや、豈恐れざるべけむや。今世の大乗佛教の哲學を言ふもの、先づ起信論を口にす、而して既に其題號票して起信といふにあらずや、本覺の靈境始覺の如來之に信を起さしめむが爲のみ、徒らに縁起論の思索に耽るが爲ならむや。若し之を信ぜずんば人は何によりて宗教の面目たる修行安心の來ることあらん、況んや最後の西方阿彌陀佛の如き何等の連絡を可有せむ、佛陀の境界は思索推理を極めて初めて之を信するにあらず、吾人思議の境を絶して此に絶對の信仰來る。吾人は力を極めて青年道を求むるの士に警告す、彼眞如、法性なる者は佛陀

の靈境のみ、而して此境や此に達して初めて知るを得べきのみ。而して我親覺聖人は吾人か信仰に依りて彼士に於て達し得べき最後の靈境也と斷言し、吾人現世に於て信仰の對象となり得べからずと示し給ふ、是極樂無爲涅槃界の眞實證也。誤て吾人言語の及ばざる法性法身の境界を以て直ちに信仰の對象と爲すべからず、法性法身の境界は吾人相對の凡夫思慮の及ばざることなるを以て方便法身の彌陀佛來現し給ふにあらずや、不可思議の誓願を起し給ふにあらずや、無明の大夜をあらはれみて、法身の光輪さほもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する、光明無量壽命無量の覺體をあらはしたまふにあらずや、稱へ易き信じ易き名號を案じ出したまひたるにあらずや。我等のたのむ所は誓願也、名號也、信心也、如來の御はからひ也、涅槃や法性や是如來の御はからひによりて自然の來る所、決して吾人信仰の對象にあらずや。自然法爾章の文字、無上佛といひ無上涅槃といふ、是皆眞實證の靈境を説きたまふもの、彌陀佛は自然のやふをしらせんれうとは彌陀如來如より來生し給ふの謂、誤りて信仰の對象を以て無色無形の法性眞如の謂也と解するを得ざれ。實に自然法爾章は聖人晚年信仰圓熟の極に達し、一々の言、一々の字、皆信仰より溢れ來る所、自然法爾の文字を以て願力をあらはし、不可思議をあらはし、名號をあらはし、信心をあらはし、遂に眞實證の有様をもあらはしたまへるなり、是善導大師が所謂畢竟道遙離有無の講たらずんばあらす。而して遂に法性法身より方便法身の來生したまひし所以のものは畢竟此願力自然の力を以て逍遙自然の境に導き給ふ也、凡夫の計ひにあらず、如來の計ひたまふ所、唯佛智不思議と信仰し奉るべき也との法話なり。殊に和讚與書に於て獲得名號章と共に自然法爾章を併記して皆佛陀回向の極所を示し給ふ、即ち彼不可思議の名號が如來の因果上の御力によりて來るのみならず、此名號を聞信して信樂を獲得する亦如來選擇の本願と成就とによることを示したまふの謂、要するに佛智不思議の極、義なきを義とするの總與を傾けたまふもの、聖人最後の遺訓として反覆拜誦し奉るべし、一點思索の念を加ふべからず。曰く、

稷の字は因位のとさうるを稷といふ、得の字は果位のとさにいたりてうるを得といふなり、名の字は因位のとさのなを名といふ、號の字は果位のとさのなを號といふ、自然といふは、自はれのつからといふ、行者のはからひにあらず、しからしむといふことはなり、然といふはしからしむといふことは行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるかゆへに、法爾とい

ふは、如來の御ちかひなるかゆへに、しからしむるを法爾といふ、この法爾は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに他力には義なきを義とすとすべしなり、彌陀佛の御ちかひのもより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを自然とまふすどとさしてさふらふ、ちかひのやうは無上佛にならしめんとかひたまへるなり、無上佛とまうすはかたちもなくまします、かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり、かたちもましますとせしめるときは無上涅槃とはまふさず、かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はしめて彌陀佛とそまひならひてさふらふ、彌陀佛は自然のやうをしらせんれなり、この道理をこゝろ多つるのちは、この自然のことはつねにさたすへきにはあらざるなり、つねに自然をさたせば義なきを義とすとすといふことは、なを義のあるべし、これは佛智の不思議にてあるなり、

聖人晩年御示寂の時近きに在りて、眞實證の境界は既に眼前に髣髴たるの狀一々の文字の上に了々たり。ちかひのやうは無上佛にならしめんとかひたまへるなりとは聖人の當に入らんとしたまへる證果也、嗚呼現世の慈愛は其理想を實現すべからず眞實證の靈境は彼岸の樂土にあり。現世の血族恩愛洵に絶ち難く、隔世の追慕眞に忍ぶべからずと雖、皆悉く廬假夢幻の世界のみ。唯此間に清淨眞實にして變らざるもの、唯願力成就の念佛のみ、如來回向の信心のみ、此の如くして若し命終りぬれば忽ち涅槃寂靜の樂土に入り、現世の父母兄弟血族のみならず一切の衆生四海兄弟にして皆盡十方無碍の光明の大慈悲海中俱に一處に會せざるはなし、嗚呼未來なる哉、順次生なる哉、彼西岸上なる哉。嘆異鈔に曰く

慈悲に聖道淨土のかはりめあり、聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり、しかれどもおもふかごとくたすけとくるときははめてありがたし、淨土の慈悲といふは念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふかごとく衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかんいとをし不便とおもふとも存知のごとくたすけかたければこの慈悲始

終なし、しかれば念佛まうすのみぞすゑとをりたる大慈悲心にてさふらふべき

親鸞は父母の孝養のためとて念佛一遍にてもまうしたることいまださふらはす、そのゆへは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いづれもこの順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり、わがちからにてはげむ善にてもさふらはとこそ念佛を回向して、父母をもたすけさふらはめ、たゞ自力をすて、いそぎ淨土のさとりをひらきなば六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもてまづ有縁を度すべきなり、

煩惱具足の身をもちて、すてにさとりをひらくといふと、この條もてのほかのことさふらふ、乃至おほよそ今生にあらは煩惱惡障を斷せんこと、さばめてありがたさあひた、眞言法華を行する淨侶なをもて順次生のさとりをいひ、いかにいはんや戒行慧解ともになしといへども彌陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土のさしにつさぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無碍の光明に一味にして一切の衆生を利益せんときこそ、さとりにてはさふらへ、この身をもて、さとりをひらくとさふらふなるひとは、釋尊のごとく種々の應化の身をも現じ、三十二相八十隨形好をも具足して説法利益さふらふにや、これをこそ今生にさとりをひらく本とはまふし候へ、

嗚呼吾人穢土にあるもの、何ぞ大慈大悲を行はむ、何ぞ父母兄弟を助くるを得む、何ぞ悟を開くと言はむ、唯念佛の一法あるのみ。而して同一念佛して遂に往生の素懷を遂げ給ひし慈父は今や何所に在さむ、同一に念佛して淨土に還歸したまひし愛兄は何所に在さむ、皆是一如法界の靈境に遊びたまひて、恰も本師彌陀の如く、報應化種々の身を現し、釋尊の如く、三十二相八十隨形好をも具足して我等を救ひたまふべし。是實に還相回向の利益、園林遊戯の功德を施し給ふ者、此境に至りて大慈大悲心をもてれもふかごとく衆生を利益したまふなり、世々生々の父母兄弟を初めとして我等有縁の凡愚六道四生の業苦に沈めるもの神通方便を以て濟度し給ふ也。嗚呼是れ吾人が現に人生に於て引接を蒙りつゝあるの事實也、首を回らせば現世稱して慈父と呼び愛兄と呼びし人々は既に是れ如來聖者の權化として我等を大悲攝取の中に引入したまひしもの。生別死別の悲哀は是れ無上迅速の穢土を警告したまひしものにして、篤信深厚の信行は皆是大慈大悲の誘引たらざるはなかりき。而して皆是還相

回向の菩薩の行爲たらざるはなし、嗚呼我が慈父愛兄は自己の樂を求めずして自身に貪着するの念を遠離したまへり。是實に無染清淨心にして菩薩の智慧門を示し給ひし也。嗚呼我慈父愛兄は子の苦を援て樂を與へ給へり、是實に安清淨心にして菩薩の慈悲門を示し玉ひし也。嗚呼我が慈父愛兄は子を憐愍して自ら供することを遠離し玉へり、是實に樂清淨心にして菩薩の方便門を示し給ひし也。大菩薩法身の中に於て常に三昧に在して、種々の身、種々の神通、種々の説法を現ずるを示すこと皆本願力より起るといふ者我面り之を享く。嗚呼慈父愛兄は大悲徃還の回向を體現したまひし也、感愍に他利利他の深義を事實に示したまひし也、嗚呼仰て奉持すべき也、特に頂戴すべき也矣。

東溪君の遺簡

左の二篇は本號編輯後校正の時僅底より出づる所、讀みてゆくに四海兄弟同一念佛無別道故の文字を喜びたまへるところに到り、不可思議の靈感に堪へず、固より予は社説を草する時には少しも此手紙のことは記憶せざりし也  
南無阿彌陀佛 常 觀

拜呈、其後は甚敷御無音に打過きました、御許被下度候、扱て日清會話集韓國に來りて落筆仕り候、昌城に到着已來何と無く、責任の重き感ありて書面も認め申さず失禮のみいたし候、韓國に來りて漸く暇を得て今書面を認むる事としました、先づ御案し被下候戰闘には未だ參加いたさず、懷仁占領の際は一息も無き者と思の外敵は逃去の後にて何の風情も無之、實に張込の疲れて一際身に疲勞を感じ申せり、大連灣上陸已來百里に余る寒中の行軍は今日より思へば随分甚しく身体の今迄無事なりし事不思議に思はる程の在様にて在りき、突圍であるに聞きし程寒さは無かりたが髯のつらは毎日にて在りき、外套の息のかゝる處は凍りて白癩の如く相成り、朝充めし辨當の石の如く成る事は珍しからぬ事ですが、思の外雪の降らなかつたは我等の幸福です、大連灣出發已來雨の降りたは韓國に來てから二回です、今後は随分降雨が甚敷いそうです、韓人の屋根を修理するを見て余程降雨は甚敷い様子です、命が長くて苦か多ひのです、此頃は言語が不通で一口も分らなひのです、其に微發物が多いのです、牛馬の四十頭も集るやら、人夫の入用やら、皆な廻らぬ筆て

筆談なのです、處が彼我共に誤解が多くて時折は韓人の横づらが鳴るのです、後から誤解を分りて吹出すのです、但し韓國人は今日日本の勢に恐れて居るから事は仕安ひです、然し一寸も言語の分らぬのは實に面倒なものです、此頃は内地に居るのとは体も樂て又、入浴なども隔日には大概入る事が出来るのです、眞黒なる面も少々白くなりました、髯も八字になりました、殊に韓國では髯が大切です、髯が一つの威嚴を保つ材料となるのです、處で氣候ですが本國でなければなれたの花げんげの花が見へような陽氣になりました、韓國ではまだ見ませぬが、韓人も耕作に出かけました、少々樹木の稍も青くなり、鴨綠江も氷が無くなり舟が行きたり歸りたり、私の居る處は城内で門を出ると鴨綠江なので、是から閑暇を得たら散歩に河岸をぶらつくつもりです、實にのん気なのですが心の内は責任の爲守時も休みが無いのです、是丈がいやなのです、其から此地には郡守と云ふ者が居るです、威張りて居るです、日本で云ふたら私等の生れる十年程も前の有様が丁度こんなものだろうと思ひます、郡守が郷長と云ふ者に命令を傳へると其はく、嚴重なもので、士民はひるが鹽にまみれた様な有様で、皆命に應ずるのです、其郡守が郷長に何でも云付るので、随分面白い、今後は此處に長く居るかも知れぬです、余り長く居ると身体に故障を生じ無いかと案するのです、戰闘の爲に身を終るは當然なるも守備して病氣にやられてはと此頃は養生して居ります、然し云何なる病氣に犯されて此地の土と變するも、私は更に後悔は無いのです、再び古郷を見るときは思は無いのです、今後亦命令あらは何時何處へ動やら分ら無いのです、實に有爲轉變は我等が今日の有様です、其に付きて

今頃の大快戦に參加せざりしは實に残念です、國許より諸氏の書簡を得る毎に漸汗の至りて、命長ければ恥か多いとは、是の事です、嗚呼世界がいやになりたてず、なれど命か盡きぬのです、盡きぬ間は苦か多ひです、恥が多いです、死ぬ事が出来ぬです、生の有る間は何でも出来るは爲さねばならぬので、唯命之に順ふ様なものです、扱古郷より手紙が到着しました、三月二十一日出の書面です、承れば一周忌も御營みに相成り伯母様も御上京なされたそうです、私は毎々生蘇様より御書面を受けながら、未だ改めて御返事申しませぬ、御許し被下度候、實に書面を書くのがいやて其に朋友の諸氏よりは雨が降る程書面を載くので御返事するの面倒なのです、別々に書面を差上る事は面平御免、兄上を始として御三人様の許へ一本の書面で私の無事な事は御承知被下度い、

其から我軍の運動ですが、是は國許の新聞の方が我等とは余程委しいのです、我等の處ては何か何かさつぱり分らないのです、唯私等の居る處は我聯隊は寛甸と云ふ處に在りて、我大隊は懷仁と云ふ處に在り、其内我小隊は楚山と云ふ處の守備なのです、是楚山の小隊から三十里南の方の昌城と云ふ處、遼州よりは北の方へ十八里の處なのです、今は其處に流刑同前なのです、

夫れから宗教の御話ですが、此地は佛教は無い様で、日本の天理教の如き者か有りて、病氣がありても何か在りても祈禱して、夜と無く晝となく大鼓の音やら、鉦鼓の音やら、實に甚敷ものは三晝夜も引續て祈り通しにやつて居る、儒道の道は行はれて居る様である、其故は神社の如きものがある其社には何れの堂内も皆書籍を箱に納め嚴重に整備かしてある、夫れだから小兒までが一般に支那地とは字を讀む事が出来る様です、佛教の傳道は余程此際變動に乗じて乗込むだら随分面白く、且つ佛の慈悲が傳へらるゝだらうと思はれる、彼の鳳凰城に來たときは耶穌教者は傳道の爲慰勞會と稱して、壯大なる宿舎を取りて軍人に與るに御茶と書面用の紙封筒、書けぬ人には書きて與へなど、又甚夥の備付け剪髮器具及雜誌新聞等、其外傳道の事業は隔日午後二時より傳道し尙ほ聖書に付て尋問の件あらは何時にても是に答へるなど、又洗濯用の石鹼を與へなど、實に周到なる出來方であつた、本派からは布教師も來ては居りたが一遍も我等の爲に傳道したる事無し、尤も旅團に一人放手の廻らぬ故であらうか日本之佛教は金が無くて傳道の事業が出来ないのだから、其に付ても將來韓國は日本の所制ならざる可ら

ず、今日の變動に乗じて佛教の傳道に力を入れざれば戦地にある外教既に斯かき有様なれば、機を見て外教傳道の韓國に手を入るゝは必然なり、此の欲深き韓人に向て少々金を投して傳道に力を入るゝあらば、隨分佛教の味を分配する事が出来るだるゝ、尤も慈善的に出て、事業を成すには、醫師に依て傳道せば余程早く傳道が出来るだるゝ、韓人は馬鹿高尙に據へて居る、髯を延して白衣を着、大きな帽子を被りて晝の間は寸時も取る事が無い、其て如何なる人も日本の様に物を運ぶに肩に載する事が無い、少々擔へ込て居る、郷長の書配てさへ自身で棒一本も立る事は無く皆下人に命じて居る、郷長なんか少々坂路を登るてさへ後より人に押させて登る位である、然しなから是等は私の今居る處の有様です、京城の附近は余程開けて居る様子です、

其から私の事ですが常に佛陀の加護を受け斯の如く壯健なので有らう、渡清已來未だ一服の薬も飲まねと云ふても宜しい、用ひたのは健胃散二三回、其余に薬を用ひた事は無い、又宗教上に於ては余り讀む事はしませぬが御送附に預りた未燈鈔、讀む余暇が無い一枚か二枚程づゝは毎日日課として拜見して居ます、是から求道を拜見するので、朝早く起きて散歩の時(此間に分隊の者か室の掃除です)携へて清新なる空氣の内にて拜讀と日課を定めた、實に異域に在りて佛の御慈悲を拜讀すると殊更味がある、何となく涙の催されて喜ば敷く讀み續ける事が出来無い事が在る、求道の御送附を受けて初めて開きた時歡喜愛樂の文字が目にとまり、大慈の光明は吾人を照して長へに信心歡喜せしめ給ふ、信仰の水に飲む者は人生の渴を癒するを得む、源信和尚の煩惱に眼障へられて見奉らずと雖大悲憐む事無く常に我を照し玉ふと、拜讀して私は泣いた、今書きつゝも喜敷く涙目に満つるとき、他人來りて何だか變な顔して歸つてしまつた、夫て四海中兄弟也同一念佛無別同故と、何と深き味があるては無ひか、私は常に味ふた同一念佛無別同故か今又初ての如く感せられました、明日から此求道を逐一拜讀するので、樂しみます、又表紙が異はりましたれ、何たか地獄へ來迎を受けた感下がしました、實に我等は地獄です、餓鬼です、夕食の運きときは十二時迄も喰はず飲まずして居るときは餓鬼です、地獄です、又他國に來りて微發して人夫を使うやら、食料の爲め鶏等を集めて之を食し事を思ひ、我身の罪惡が目につきて、吾祖の慈悲愚禿禿愛欲之塵海等の御文が浮か出て、非常に喜敷存しました、只今書面を出すべき時が來てもうかく事が出来ませぬ、此外は次の便に御送り申す事としませう。昌城にて 東溪大觀拜

# 信仰上の活問題

佛陀を信ずるは信仰の中心なり、然れども此佛陀を信ずるの信仰は人生の凡ての出来事に働くものなり。念佛を専らにするは信仰の行爲なり、然るに念佛に専心なる行爲は如何なる仕事の上にも顯はるゝものなり。信仰は活物なり、政治にも、外交にも、軍事にも、内治にも、社會にも、其力を顯はし來りて此に活信仰たるの實を見る。

兩々對陣して、何れも全力を盡して戦ふ諺に曰く、最後、喫煙二服の間に勝敗の數決すべしと、而して忍耐力強くして、死を冒して突貫するもの遂に最後の勝利を占むべしといふ、而して何物の力かよく死を冒して突貫せしむる、唯信仰の力也。既に軍事上に此事あり、獨り槍組折衝の間に於て此理なからむや、兩者既に全力を傾注して力相平均す、一毫の力を加ふるもの、遂に兩者の均勢を破らむとす、而して兩者全力を盡す、一毫の増すべきを見ず、唯一分間も忍耐多きものは必ず最後の勝利を占めむ、而して兩者の實力兩々相知ること

互に掌を見るが如し、而も破裂の結果兩者非常なる傷みを感じることも亦瞭々火を視るよりも明らか也。此間に處して何物の力か一分間にてもより多く忍耐せしむる、軍事上死を冒して突貫することあり、外交上死を冒して突貫するとなからむや、此の如き場合に利害を打算せずして突貫するは盲目無謀也と言はむか。吾人は寧ろ此際に至りて利害を打算して左右するの念に鈍ならむことを望むもの也、何物か能く此境に處して無謀大膽ならしむる、曰く唯信仰也、信仰也。

日本人は敵の虚を衝きて其死命を制するに巧也、然れども無謀を敢てするの大膽なし。敵を誘ひて一舉して之を殲すに敏捷なり、然れども殊更死地に陥りて自ら生くべからず敏捷なり。否口に念佛を唱へ、心に佛陀を信じ、死後極樂を豫望して突貫したる一般人民は戰場に於て勝利を得たり。各國の評判に懸念し、利害の打算に巧にして、而も實利よりも虚名を貴びて心中一の信仰なき政治家外交家は最後の一壘をだに死守する能はざりき。言ふ勿れ日本人は外交に巧ならずと、吾人は言はむとす、最後の壘を守るべくあまり巧に過ぐる也。

吾人以爲らく此間に處して何等の巧か之あらむ、唯決心也、

若し果して日本の主張する所正理公道にして東洋平和の爲に必要、一黙譲るべからざる極點なりと確信せば、たとひ國を擧げて焦土たらしむるも戦ふの決心をなさざりしか。既に此決心を以て開戦せしに非ずや、何が故に最後に此決心を爲し能はざりしか、是明らかに信仰なきの證に非ずや。若し最初より譲るべからざる極所已上を提出せしとせんか是既に自ら信ぜざるもの、何ぞ人をして之に服せしむるを得んや、不真面目の極と言ふべし。人或は最初より多くを提出して掛引を巧にせざりしを悔ゆるものあり、此の如きの證はより多くを得んと欲して、より多くを失ふ無信仰の言、決して取らざるなり。既に自ら信じて提出したるものすら死守する能はざる者、より多くを提出すればとて好果を得べからざる明らかなり。吾人は確言す、自ら信ずると公言するも其信するや利益の爲めに計る也、其信するや唯動かざらんと期するなり。眞個に信ずるものは之に異り、利害を離れて譲るべからざる是れ信ずるなり、自ら動かんとするも動かべからざる是信する也。

是政治家の事、須らく専門に之を講究するに任さむ。吾人は唯此場合に暴露し來りたる我政治家外交家の無信仰を警告せんとするもの也。而して獨り談判當局者のみを難すべからず、寧ろ之を左右したる元老若くは内閣諸公なるもの、無信仰を暴露したるものなり。一層進みて言はば國民全体が無信仰なるを暴露したるもの也、吾人をして言はしめば間接に政黨も新聞記者も教育家も宗教家と雖其責を免るべからざる也。吾人常に言ふが如く信仰とは實驗によりて自覺すること也、日本國民は此一大實驗によりて精神上如何に自己が不足なるかを自覺すべき也。

人間にして若し常に自己の不足を顧るの用意なくんば、慢心を生ず、吾人は確信す上下官民戰勝の爲めに生じたる慢心が遂に此不信を暴露するの狀態に至りたるなり。窮鼠却て猫を噛む、慢心を生じたるものは必ず敗る、開戦露國の失敗も慢心の結果也、最後に我國の失敗も慢心の結果也。獨り政治家のみならず軍人と雖必ず此責を辭すべからず、人窮境に謹みて順境に慢するは信仰なきの特徴に非ずや、國民既に慢心を生じて自己を顧るの念に乏し。此に於て憤激度を失し、漫



に他を責めて、暴動を極むるに至る、人民亦無信仰を暴露するものと謂つべし。吾人は一日も早く上下舉て其缺點を自覺せんことを切望に堪へざる也。

世人或は宗教の見地に立ちて此の如き論議をなすを訝るものあらむ。吾人固より戦争の悲惨を憂へ、猶之を繼續するの惨の惨なるを憂ふ、吾人亦國際間と雖個人間と均しく單に自己の利益のみを主張するは平和を持來すの道にあらざるを知る。然れども既に此惨を敢てし、之によりて眞個に平和を止むるに眞面目ならば決して此の如き態度に出で得らるべき筈なし。吾人をして忌憚なく言はしめば小康に安んじ、虚名を貴ぶの姑息心に支配せられたるを見る。此際最も滑稽なるは日本は平和人道を重んずるが故に讓歩すと言へる口實なり。若し眞個に人道を重んずるならむか當初より何ぞ戦争の惨を敢てしたる、畢竟是れ自ら慰むる氣安めにあらざれば御世辭的のねだてのみ。果して眞個に人道を行はんと欲せば其主張を貫徹したるの後、再幾許を與ふるも可ならずや、吾人は個人信仰として人間が自己の力を以て慈悲を行ひ得べしと考ふるは佛の大慈大悲に對して頗る不遜の態度と考ふるもの

講話

佛力無窮

(求道學舎日曜講話)

近角常觀

今日の題は「佛力無窮」と致しました、諸方面より近頃の世狀を觀察して見るに此間中より講和の問題が起り、引き續きて意外の騒ぎが現出し、色々と感じずる事が夥しい次第である。今日は其方に就いての考をも遠慮無く披瀝して見度いと思ひます。

全體我々凡夫の淺蕪なる智慧では人生將來の事は一として豫期する事は出来ぬ、現に今回の事件の如き斯様の事が有らうなどは此間迄は誰も思ひ到らなかつた。凡て世上の事は斯の如き有様で若し偉大の佛力が無かつたなら人生一事として解釋は出来ぬのである。夫れて眞實信仰の味ひより申せば「自分の信仰より謂へば斯の如くなるべき理である」など、自分一人の考へを以てしかく無造作に決め込む事は出来ぬ。亦決め込まず無くて各人皆佛を仰いで居れば、其人々々に從つて有らゆる事件に關し舜々と佛陀の深意を味はせて貰ふ事が出来るのである。抑々信仰より言ふ事を無信仰の眼より見れば何等の價值も無くて極めて不合理と聞こえる。例せば過般

也。故に自己か慢心の結果を塗抹粉飾するに知らず識らずの間に人道の名を以てするが如きは猶慢心の覺めざる言語にして亦國民の慢心を警策するの言にあらざる也。

吾人は當初より日露戦争か兩國民の上に偉大なる自覺を興ふる警策なることを信せり。露國は大敗の結果政治上改革を施し其缺點を自覺せんとするの趣あり。我國民は果して自己の精神上的の缺陷を自覺せんとする趣あるか、慢心若し覺めずんば必ずや警策頻々として下らむ。若し吾人國民上下舉て此鞭撻に覺醒して、肅然として信仰の門に入らば必ずや此一大實驗の結果を空しくせざるを得む。

吾人は戰後に於ける國民の宗教的自覺を促すの念洵に切なるものあり。個人既に煩悶に陥りて自覺來る、國家既に此大煩悶に陥る、豈大自覺の氣運來らざらむや。吾人は同胞十萬が骨を異域に暴らしたる結果をして單に土地金錢權力の問題に終らしむるに忍びざる也。苦し之が爲めに遺族朋友を初めとして國民舉て一大自覺して精神上的の光明を發揮するを得ば地下の同胞以て瞑するを得む。要するに信仰は最も眞摯なる追悼にして永久其英魂を慰むる唯一感謝の發表也。冀くは我同胞十萬の犠牲をして單に物質的の意義に止らしむる勿れ。

日本海々戰の當時に於て斯様の結果は到底人間の力を以て得られたとは思へぬ、全く人力已外偉大なる御力によるものである、我々の信仰より見れば有らゆる事件は凡て斯く偉大の意味を有するもので、今度の海戰の如き寧ろ或る大なる天職が我が國民に下つたのであるとの意味を御話した。すると其後になつて或人が謂はるゝにはかく凡てを佛力で解釋して仕舞ふのはひどい、斯くては軍人の忠勇も國家の勢力も全く無になると話された。未信仰の人が信仰上の所説を斯の如く聞かれるのは決して無理で無い、何んとなれば夫等の人には根本の佛陀が無いから、全く一個の臆斷としか聞こえぬのである。去りながら信仰の信仰たる味ひは實に此所に存するので、夫がために軍人の忠勇國家の勢力を防げない、寧ろ戦いつゝある軍人自身がかく感ずるであらう、又信仰は一般の人の氣に向く爲にとて自家の所信を曲げて言ふ事は出来ぬのである。

同じく、今回の出來事を信仰上より味はつて見るに、無論後の結果より言ふのではあるが、併し我々人間としては後の結果より見る外に仕方が無い、佛でなく豫言者で無き已上は悲しい哉結果よりしか見えぬのである。偕て此度の事を一言にて申せば我が國上下共全く無信なる事を暴露し盡し、亦た無信の爲めに千古の失態を招いたものである。更らに之を言へば我國上下共非常なる佛天の御誠めを受けたものである。之は強ち講和に就いてのみ謂ふべきでは無くして國民の紛擾と雖も全く同じ事である。勿論私は今茲で講和の可否など善惡を政治上より申すのでは無い、又實際の事情は如何に成

つて居るのか深い譯は私共では解らぬ。けれども今度の講和が此の如きものに終つたのは全體自ら信ずることのなきからである。若し我が國に確固たる信仰があり、如何の事が起るとも此の點よりは動けぬと謂ふ立物が定まつて居るならば決して斯の如き失態を來す譯は無ないのである。

夫に就て「信ずる」と謂ふ語は近頃では皆の人が言ふ様になり、亦信仰の必要と謂ふ事に就ても最早や異論者は甚だ少くなつた。併しながら其信仰なる考が極めて茫然として居る、多くの人は茲に一事件が有つて其右すべきか左すべきか定まらぬは信仰がなき故である。或は氣がついて居るが、然らば如何なることが信ずるのであるかと尋ねるに唯頑固に言ひ張りて動かぬこと考へる。ところが誰とて一旦主張したことを動かすことを好むものはなければ、諸種の利害問題や各聲とか結果とか目に見える様になれば唯頑固一點張りてきめこんだものは必ず動く様になる。信仰といふことは、たとひ動きたい、變へたいと思つても動くことが出来ず、變へることの出来ぬのが信仰である。故に唯人間の力できめこんだのはダメである、必ず最後に據りて立つべき絶対がなければならぬ。恰も佛陀の力によりて動かんと欲しても動くべからざるやうに爲られた心持である、故に佛陀を見ずしてはたとへ「信ずる」と言つても「考へ」「思ふ」と言ふと何等の相違も無いのである。そこで眞の信仰は何かと謂ふに即ち宗教上の信仰である。此の宗教上の信仰が一度胸中に定まれば人生有らゆる問題に處して出所進退自から確かにゆく様になる。人生何が堅實と謂つても偉大の佛偉大の慈悲を信じて其の下に仕事

を爲す、これ程堅實のことは無い。然るにこの信仰無きと

きは唯徒らに右を顧み左を眺めするやうになる、即ち今度の如き思はざる失敗を醸す事になるのである。斯く言ふ時は政府ばかりを非難するやうであるが、如何に政府が不満であつても政府は矢張り國民の代表者である、つまり國民全体に確信が無いからである。若し確信が有るならば外交上に於ても自國の信する處を飽迄も動かぬ、動かぬと謂ふは理窟で出来るのでは無い、理窟でこそ動かぬ物は又他の理窟で壞はされる、丁度今日の科學の進歩と同じ事、右が善い左が善いの理窟はいつ迄たつても盡さる時が無い、根底に信仰が無いから駄目なのである。信仰にあらば取らぬものは初めより取らぬ取るべきものは初めより取るのである。果して平和を人道の本意と信じて居るならば戦争など初めより仕無いがよいのである。斯く考へて來れば今日の人道だの博愛だの謂ふものは偽善が多いのである。無論偽善でも善と名けらるるものなれば全く爲無には勝るが、夫が本心から出たので無いから、甚だ情け無い。極端に言へば今日人道だの平和など謂ふは結局一個の口實に過ぎぬ。我こそ自ら善を爲せりと言ふ事既に定散の善であつて眞實の信仰より謂へば人間として其様なエラさふなことが言へる筈がない、寧ろ自分の出来なだことを人道博愛の言の下に氣休めをするのである。喧嘩に負ける小供が、負けたのが即ち勝つたのであると自分乍ら心苦しき氣休めをするのと同じ事である。私は何の方面より眺めても今回の事は全く國民の無信仰を暴露したものと云ふ、如何に言語を巧みにしてもこれ丈の事は覆ふことが出来ぬのである。

鎌倉時代のやう方を見てみるに利害の念などは全く無く一見盲目的の様であるが而かも決して無茶でやつたのでは無い、一貫した信仰が有つた故斯の如き事が出来たのである。

偕て斯の如く言ふ時は今回の事件を以て全く失望的に見るやうであるが夫が決してそうではない、たとへ一面に於ては全く無信の結果であるとしても其無信なることを自覺せしめられるため感ずる事が出来るのである。兎にも角にも此度は非常の經驗を我々國民の上に賜はつたものである、或は此の爲に國民が奮りに陥るを防がれた事も有らう。熟々と感ぜさせず貰うて見るに此度は國民全體が等しく地に伏して無信を詫びるべきであらうと思ふ。斯くなれば今回の事の如き少しも憂ふことは無い、之を露西亞にしても又同じである。何れにしても我々國民は今や實に大に恐れ大に謹しむべき時に出會つて居るのである。特に我々信仰を心掛ける者は一層深く慎まねばならぬ、殊に私共宗教家より謂へば斯の如く國民をして無信仰に到らしめたは全く我國宗教家の罪である、更に一層強く慚愧せねばならぬ事と思ふ、この際自分こそ罪が無いなど意張れた者は一人も無いのである。更らに爲政者の傍より見れば從來の如き徒らに「外界の評判をのみ顧慮した政治は全く無益なるを示し、自家胸中に何等の信念も皆無で有つたを暴露したのである。又之に憤激した國民も今迄萬歳の聲に酔うて居つたのが、俄かに放火亂暴其度を失つたは畢竟同じく從來の無信を暴露して仕舞つたに過ぎぬ。斯の如くして大戦の最後は唯各方面に亘りて我が國民の無信を暴露するに了つたのである。之を要するに早く國民全體が偉大の佛力を

感受して不動の地盤に立たせて貰はなくては、光明は來らぬのである。信仰的行ひか非信仰の行ひかばたとへ初めに於ては一見解ら無くても後ちになれば明かに見えて來る。信仰は抑も／＼活き物である、各人の心に於て冷暖自知して普通の人の氣着かぬ所にも大なる意味を感じざる事が必要である。心を佛陀の弘誓海に置いて見れば人生の事一として深甚の意味を有せぬものは無い、信仰の威力は斯の如くして現はれて下さるのである。何も言を勵まして申すのでは無いが先日来感じて居た所を聊か申述べた次第である。

猶ほ極端に言つて見れば露西亞に於て暴動が起つて、亦今我が國彌々と謂ふ時に日本に於ても暴動が現はれた、何と無く俗に謂ふうつつて來たので無いかといふ様の感じが爲る。此の事は信仰上より味はつて見ると頗る恐ろしい事で、信仰の眼より見れば斯の如く相手の一方に起つた事は亦他の一方にも起るつて來る場合が多いのである、所謂因果應報の味である、公明正大の日本と思つて居つても本心で無いものは終に其正体を現はして仕舞つた、切り結んで斷言すれば大戦の結果は露西亞の負けたが露西亞の自覺問題となつた次は日本でも爲政者は爲政者で遺憾無く自家の無信を暴露し盡し、國民は國民で餘り無く自己の無信をさらけ出し日本の自覺問題となつたのである。今後は此の偉大なる悲体の御警めは目を醒まし、誰彼の區別無く御互に大に勉めねばならぬ事と思ふ、何も人の上を責めて居る必要は無い、各自に其務めに従つて一生懸命に努力すれば可いのである。佛陀の御眞意は何所に存し給はるか殆んど伺う事が出来ぬ、實に佛力は無窮である。

尙ほ色々と感じることは夥しいが各人々に思ふこと故此上は申しませぬ、兎に角信仰上大に勉め無くては前途が頗る危うくてならぬ若し然らずは政治上の問題等よりも寧ろ國民の心の方があふなからうと思ふ、信仰の力によりて能く生きかへる事が出来るのである。人生は良さが良きにて安心ならず悪しさが悪しきにて必ずしも失望する事は無い、要は偉大の佛力に信順する事である。已上は政治外交等の問題は別として唯私の感じたる有の儘を申し上げた次第である、どうも信仰より言ふ時はいつも遠慮無くなつて言ひ過ぎて仕舞ふ嫌ひがある。併し私一人の私情として言ふ時は他迄も残念であり忌々しき事と思ふて居る事は皆様と同様である、けれ共其處に偉大の佛力を感ぜさせて貰ふと佛力無窮にして限りが無い、此の際に於て又一入深く喜ばせて貰ふ事が出来るのである。殊に繰返して申し置き度きは前にも謂た所の世人の信仰に對する誤解である、信仰が必要であるとは今や誰でも言ふ所であるが其信仰と謂ふものが何を言ふのか内容のなきもので實に無意味である。信仰は如何にして立つかと謂へば世人の多くば其場合々に應じて信仰があるもの、様に考へて居る。そんな各の場合に始めて起る如きものには無くて眞の信仰は佛力に對して信順する心是れ一つである。此の唯一つの信仰がありて一切が皆足りて来る、此の唯一つの信仰が行動に發し各々の場合に事實に現はれて即ち大なる力と成つて来るのである、茲に於てか佛力無窮といふ味も存在するのである。已上は近頃の事實問題に就いて信仰上最も著しく感じたる所を御話致した者であるが、次には例の如く親鸞聖人の信仰

門を以て知識成就の意趣を傳ふるに依て也」と記してある、つまり親鸞聖人の御心では眞實信仰の人ならば信仰の力に依つて自然に斯く出来るものであるとの御考へである。願力成就の五念門であれば五念の行は既に願力に具足してある、二十一個條には特にこの事は記して無いが既に願力成就の五念門の如くである上はこの御意に相違無い、親鸞聖人の信仰では必ず斯くなるべき事と伺はれる。一寸初めての方の爲めに讀み上げて見ると

- 一 諸法を誹謗す可からず。
- 一 縦ひ聖教並に師判を寫し賜はると雖も師説に背くの輩に於ては衆徒の義定あつて須く傳ふる所の聖教悔ひ還へざる可し。

此の條の如きは一見した所では全然歎異鈔、口傳鈔の反對である、口傳鈔にては常陸の信樂房が突鼻に預かつて下向の時蓮位房が、豫て預け渡さるゝ所の本尊聖教を取り返へそうかと尋ねられた。其の時聖人の御言葉には、左様の事は決してならぬ、念佛聖教は親鸞が私の物では無くて如來の御物である、如來の御物を誰の彼のと申すべき法は無い、たとへ其聖教に自分の名字が載つて居ればとて法師にくければ袈裟迄の譬の如く其の聖教を山野に投げ棄てたにしても、其の處に集る虫獸の類が其の爲めに廣大の因縁を蒙るのであると仰せられてある。又歎異鈔には

專修念佛の輩の、わが弟子、ひとの弟子といふ争論の候ふらんこと、以の外の子細なり。親鸞は弟子一人も持たず候。其故は我が計ひにてひとに念佛を申させ候はゞこそ弟子に

を直接に味はせて頂き度いと思ふ。此夏高田の淨興寺でみてきた專修念佛張文日記の事は他日十分に書いて見たいと思ふが今日聊か此の事を申し上げる考である。此張文日記の事は已前よりも度々拜讀して居たが斯の如き貳拾壹個條の掟を設くるなどはどうも親鸞聖人の遣り方には合はぬ、聖人は恐らく此の如きこせつきた遣り方は爲さる事があるまいとばかり感じて居つた。處が今回淨興寺所藏の張文を拜見するに果して聖人の自作では無いが、御弟子の善性上人と申す方が親鸞聖人平日の仰せを集記せられたものであつた。其の書き方は既に皆様も御承知の通りで一つ何々すべからず、一つ何々すべからずと謂ふ具合に、二十一箇條の掟を並べたものであるが私は親鸞聖人の教えに於て斯様の掟が出来たと謂ふ事には非常な味ひを感じるのである。何づれ此の事に就きては後日委しく書く積りであるから今日は唯ざつとにして置きますが、要するに斯の如き道德的行爲は何から來たと謂ふにこれは信仰上より來りたる新たな五念門なのである。五念門と謂ふのは禮拜、讚嘆、作願、觀察、廻向の五つの信仰後の行爲を申すので、此の五念門が信仰夫れ自身より來る事は親鸞聖人既に出入二門偈に於て示されてある。則ち二門偈に於ては「云何か禮拜す身業に禮し給ひき」「云何か讚歎す、口業に讚じ給ひき」と謂ふ具合に、此の信仰後の五念の行は皆佛我等が爲めに既に業に爲し給へるものであると仰せられてある。今の二十一個條も又之と同じく信仰より來るとの思召しなので即ち此の奥書には「抑も、此の誓文を書き置く事は新選五念門の如く註論及び先師の作りに違はず、願力成就の五念

ても候はめ、ひとへに彌陀の御催らしにあづかりて念佛申し候人を、我が弟子と申すこと、さばめたる荒涼の事なり。つくべき縁あればともなひ、離るべき縁あれば、離るゝ事のあるものを、師を背きてひとにつれて念佛すれば往生すべからざるものなり、なんどいふこと不可説なり。如來より賜はりたる信心を我が物顔に取りかへさんと申すにや、かへすゝもあるべからざる事なり云云。

の御文さへある。然るに今此の貳拾壹個條中には此等と全く正反舛に師説に背く時は聖教を取り返へすとある、是は如何にと謂ふに此處が甚だ意味のある點で、聖人御自身には取り返し爲さる無くて他の弟子達が穿鑿して皆相寄りて取り返すと謂ふのである。如何にも弟子達が聖人を信じて居られた事、如何にも恩師を慕たうて居られた様子が之れて見る事か出来る。其次ぎには

- 一、修學の二道に於ては互に偏執有るべからず。
  - 一、無智の身を以て諍論を好む可らず。
- この意味は亦歎異鈔にも出て居る、つまり凡夫愚痴の身でありながら諍論の席に近つて淺間しき煩惱を起すなどの御誠めてある。次は

- 一、未だ師説を傳へざる輩、私に邪義を説きて師匠の惡名を掲ぐる事最も之を留む可し。
- 一、是非を勘さず私に弟子等勘當す可らず。
- 一、念佛門に於ては十惡五逆も生ると信知して、而かも小罪をも犯す可らず。

是れ亦口傳鈔の「罪は五逆謗法生ると知りて、而も小罪も造

る可らず」の章と同じである。無智の身に於ては戲論諍論の處百由旬遠離すべし。意味は第四番目と同一であるが謂ひ方が實に強い。自分が議論せぬばかりでなく議論する様な人に相手になるなどの事。

一、船の大乗を留むべし。

一、夜道を張り獨り行く事を留むべし。

一、師長を輕慢す可らず、師長と謂ふは愚禿鈔上の仁邪を見る可きものなり。

愚禿鈔上の仁邪とあるは則ち「賢者の信を聞いて愚禿が心を顯はす」とある中に其上卷には賢者の信は内賢にして外愚也、との意味をかゝれたものである。

一、諸事に付きて人を難す可らず。

佛陀の膝下に慚愧すべき身にて他人の上を非難されべきで無

一、念佛の行者造惡の身を以て諸佛如來と同じき旨稱すべからず。

聖人は彌陀の本願を信するに於ては凡夫の我々と雖も諸佛菩薩と同等であると迄仰せられた。處が當時此の御意を異解する者が出來て然らば我々は既に諸佛如來と同じであると言ひ詰める人達があつた。此の一條は則ちかゝる人々を誡め給ひたる者である、歎異鈔にても同じく

煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覺月すみやかに現はれて、盡十方の无碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せん時にこそさとりにては候へ。此の身を以てさとりを開くと候なる人は、釋尊の如く種々の應化の身をも現じ、三十二

勤行の日酒狂を留む可し。

精進の日には魚鳥を食してはならぬ、平日酒を止める事か出來ぬなら、せめて念佛勤行の日丈けなりとも酒を廢せよとの戒めてある。

一、忌は其所の主の忌み給はむに隨ふ可し。

信仰より謂ふ時は物忌みなどは全く無意味である、鬼神であるとか、方角であるとか謂ふ考は斷然廢して仕舞ふが聖人本來の信仰である。處が其の惡影響として他人が眞地目にやつて居る處をも之を穢がして平然たる輩が出來て來た。茲に於て聖人は右の如く敢て自分の信仰を曲げるでは無いが、先づ其地の領主の物忌み給ふに習へと制裁せられた次第である。現に常陸の平太郎が熊野權現に參詣する時に當つても聖人は傳繪に於て

しかあれば本地の誓願を信じて、一向に念佛を事とせん輩、公務にも従がひ、領主にも駈仕して、其靈地をふみ、其社廟に詣せんこと、更に自心の發起する所にあらず。然かれは垂跡に於いて、内壞虛假の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず、たゞ本地の誓約に任かすべし、穴賢々々、神威を輕ろしむるにあらず、努め冥贓を廻らし給ふ事なかれ云云。これによりて平太郎熊野に參詣す、道の作法とりわき整ふる儀無し、たゞ常没の凡情に従がつて更らに不淨をも刷くこと無し。(下略)

已前廿一箇條既録斯の如し、堅く此法を守つて敢て違執

相、八十隨形好をも具足して説法利益候にや。此れをこそ今生にさとりを開く本とは申し候へ。

かく示されてあつて、我々の身が直ちに佛陀などは假にも有るべき事て無い、佛陀の境界は我々が未來に於ての非常な理想なのである。此の義は今度の雜誌に於て書いて見度いと思つて居る、前號前を號に於て「行」と「信」とを書きた故今度此の「證」の味ひを述べて見度いと考へて居る。次には

一、人倫並に牛馬賣り買ひする口入を留むべし。

此の條の如きは今日に於ても社會問題、人道問題として重大のものである。信仰は千古新らしい、如何なる問題にても唯一つ信仰を得る事に據つて立派に解決が着くのである。

一、謔言、中言、虚言を留む可し。

一、他人の妻女を懷犯する事を留む可し。

他人の妻を姦してはならぬと謂ふのである。今日より見るともとより當然の事て、寧ろ斯様の事を態々斷つたのが、かしいと思はれるが、當時の風習に於ては頗る緊要で有つたに違ひ無い。殊に我が國は古來より男子の節操が亂れ易き故此の點に就きては一層の注意を要するのである。聖人は一方には在家の形を教えながら一方には男女の節操を嚴しく訓誡せられたのである。

一、もろくの博奕雙六を留むべし。

信仰の上より見れば圍碁、トランプ等も余り能くは無いのであらう。

一、念佛勤行の日男女同坐すべからず。

一、同じき勤行の日魚鳥並に五辛を食す可らず、同じく

す可らず、此制法を用ゐざるの輩に於ては宜しく衆徒の

僉議を経て、衆中より停放せらる可き者也。

而して此の次へすく引き續きて初めに申した

此誓文を書き置く事は新選五念門の如く、註論及び先師の作りに違せず、願力成就の五念門を以て知識成就の意趣を傳ふるに依て也。

の文が出て來るのである。此の所は上にも申した如く本誓文の信仰上の源を教えた處であれば最も注意を要すべき箇所である。親鸞聖人の信仰に於ては願力成就の五念門は佛陀の御力に因りて始めて出來る、同じく此の貳拾壹箇條も亦同一信仰の上よりして自然と現れ來べきものである。聖人は特に二拾壹箇條を御立てなさら無かつたが聖人の信仰に於ては疾くに此の意味が具はつて居た、極言すれば聖人が自ら御立てな爲されたも同じ事なのである。斯くて一番の最後に於て

正嘉年中此の論に依て信心疎かなる者出て來り、各偏執せしむるの刻み、古聖人より給はる所の御消息重ねて披見せしむる處なり、無上覺の悟を得ることは佛の御計ひ也、更らに行者の計にあらず、義無きを義とこそ承はり候へ、此の人々一切知らざる事候はむ、

として止めてある。此は如何かと謂ふに正嘉年中に於て門弟の間に信仰上の異論が起つた、彌陀の本願は惡人救濟である、我々は如何なる惡事を犯しても可いのであるなどの論が起つて其爲め自然と信仰を遠ざかる輩が出來て來た。夫故御消息を拜見したところが無上覺の悟を開くとは佛陀の御計ひであ

つて更らに行者の計ひで無い、義無きを義と爲るのであると仰せられたが今此箇條も皆佛の御計ひより來るのであるとの意味である。

偕て話は少し歴史問題に渡つて來るが、此の個條を集記せられた善性上人と謂ふは抑も、如何の方で有らうか、謂ふ所によれば聖人に代りて常陸稻田の跡を繼がれた入て後鳥羽天皇第二の皇子であるとの説である。稻田は御存知の如く親鸞聖人教行信證御選述の處て寺の名は初めは淨土真宗興行寺と謂ひ略して淨興寺と言つたとの事である。其後ち故ありて稻田より越後の高田に移轉して即ち現時の高田の淨興寺なるものが出來た、此の帳文日記の原本なるものは實に今尙ほ高田に現存して居るのである。併し如何様に考へて見ても親鸞聖人の御自作と謂ふ説は、とても信ずることが出來ぬ、聖人は決して斯のやうの事を爲さる可き人格では無いのである、去りながら是丈の意は必ず聖人の平生仰せらるべき事と考へる。どうも此の善性上人と如信上人覺如上人覺信尼公等との關係が不明了故私は先日常陸の或る人に尋ねて見た、處が如何なる譯か稻田の傳には善性上人の名が出て居らぬをうてある。兎に角此の廿一箇條なるものは存して居る、猶ほ他に華園文庫にも載つてある。

晩年に於ての親鸞聖人の説き方には明かに二種の傾向がある、其の一は絶對佛陀の慈悲を説く嘆異鈔風て他は即ち今日申せる如き嚴格主義である。嚴格主義と謂つても聖人の嚴格主義は他教の如く私の自力で勵行するのでは無くして信仰の偉力により自然と然かせらるのである。是につきては餘程味

は生えぬので、道義は自然に來るものであるといつても今私がいふのは全く宗教を信する信仰の種あるが故に來るのである、即道義は佛を信する事によつて生ずる自然の力より來るものである。親鸞聖人は晩年に至りて最も多く此自然といふ言葉を用ひられてある、今日は其上より御話を致さうと存じましたから自然といふ題を出したのであります。

親鸞聖人が此自然といふ言葉を解釋して自はちのづからといふ事、行者のはからひにあらず、然といふは、しからしむるといふことばなり。しからしむといふは行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるが故に。とある。佛を信じ偉大なる力に憑る上は、何事も總て其力によつて自ら然らしめらるゝのであつて、我力我はからひは少しも交へぬといふのである、自然の味はこれより生ずるのであります。然しこれ丈けては味が知れないかも知れぬ。よりに實例を擧げて尙委しく申して見ましよう。實例と申すのは私が昨日得ました二つの實例でありまして、此二人の人は兼てより私の話を聞いて切に信仰を求めて居られたのであるが遂に信仰に入られたのであります。其一人は非常に眞面目な心を起して熱心に信仰を求めらるゝ方で、それで自分の弱點を感ずる事至りて深く、過去に於ても現在に於ても自分は實に多くの罪を犯したものである、親に對しても濟まぬ。其様に罪を感ずる事が深いから心が常に苦しい、それで如何にしたらば信仰に入り安心が得られようかと至極熱心に求めらるゝので日々の行爲について萬事に氣をつけてやつて居られた。處が中々信仰が得られぬ。自信力愈々乏しく、甚だしい時は涙を流し泣

ある問題なれば再び筆をとる事にしよう、されど要するところ嘆異鈔の信仰を得れば其信仰の力で此二十一箇條は實行されることになる、かく一方歎異鈔に於て絶對の佛慈を御示し下されたと共に他方にこの自然の節制を御示し下されたは如何にも味の盡きぬ所と頌く事である。如何にも佛力無窮であります。(九月十日)

## 自然の道義

(第二求道會土曜講話)

近 角 常 觀

本日の題は自然の道義といふ題を出して置きました。自然の道義、これは實際人間の道德々義といふものは如何にして來るものであるか、又これは自ら力め自ら骨折つて達せらるゝものであらうか。此問題については今日普通一般にも大に注意を加へ、力をそゝいでこれを行はねばならぬといふ考が起つて來たのは尤な事である。然るに人々がこれを心に入れ口に言ふに關はらず、愈となると道德も徳義も中々行はれぬ。それは何ういふのであるかといふに、私が篤と考へて居る處に據れば、これは必ず人間が自力で力めたからといつて來るものでない。勿論これを求めずしては來るものでないが唯時機其極に至れば自然にして自ら來るものである。自ら自然に來るといつても、所謂自然主義といふか如く唯行きなりにかまかして置くといふのでは決してない。俗にいふ諺かぬ種

き悲しんで一向求めらるゝ事もあつた。又時としては自分は僧侶にてもなつて一代法を求めんかと思はれたるもあり、又山にても入つて靜かに御經を讀まうかと思はれたるもあつた。これ最も味のある問題で、こゝにこゝやつて御集りになつて居らるゝ方々も種々として信仰を得たいものであると思ふて御居いての方もあるし、又已に得られた方もあろうか兎に角此二つに別るゝ。て其人は信仰を得たいと言つて居らるゝものゝ、實際自分は已に佛を信じて居るものであると思つて居らるゝのであるが、猶深山に入つて御經か讀み度いとてか、僧侶になつて一代法を説き度いと考へて居らるゝ間には未だ、絶對の信仰に入られぬ證據である。絶對の信仰は決してそんなものではない。人か信仰に入るのは絶對の信仰に入るの、幾らか入つたとか幾らか入らぬとかといふ様に部分的に入る様なものではない、そこで一旦絶對の信仰に入つた以上は最早求むる餘地はない筈である、而して此境に至れば徒らに泣き悲むといふ事はない。何事につけても佛によりて安心させて貰ふて進んで行くのである。親鸞聖人も決して山に入れよとは勧められぬ、僧になれよとも仰せられぬ。唯偉大なる慈悲に安心すればよい。私は此意味の事をいつて其人に聞かした處か始めは中々解らない様子であつた。處か私は懇々と説いて遂にあなたは幾ら佛を信するといはれても未だ、絶對の信仰には達して居られぬ。それでは絶對の安心に住する事は出來ぬと申しました。處か其人はもう泣かぬ計りに悲まれた。然し私は尙話を讀んで、あなたの様に山に入るとか僧になるとかといふ如き隱遁の志は總て善くない、唯我

等は一向佛の御もよほしに預りて始めて能く御慈悲を喜はしめて貰ひ、絶對の信仰に入る事か出来るのであると言つた。處か今度は實に能く私の話を解せられて、全く佛の慈悲に接し歡喜の念盡くる處を知らず、翻然として從來の自己の考の非であつた事を解せられた。實に人か信仰を得た後より首を回らして考へたならば、從來の信仰の求め様は恰も水中に入りて而も渴を感じて居るのと同様である事かわかる。一旦慈悲に接して見れば世界の事々物々悉く喜を生ぜざるものはない、從來總ての事に對して不平を感じ不満を抱いて居たのか、却りて夢の様に思はれる。これ全く道理を離れたる處である、此道理を離れた處が、最も味のある處であるが中々わからぬ。そこで眞面目なる態度の人は何でも一分一厘も苟もせずいやろうとするから非常に窮屈である、露骨に言へば傍から見ると氣取りと見ゆる程で、時としては彼は信者ぶると人からいはれ、それがさういとなつて山にでも入ろうといふ心を起す、兎に角やり方が何處迄も窮屈であるから少しも余裕がない、安心といふものがない。然るに一旦慈悲に接した後の態度は全く一變して、非常なる喜び非常なる安心な状態である。尙進んで言へば人が信仰を得るまでは何事をするにも故意的であるが、信仰を得た後は總て自然である、何事も己の意思を雜へず落ちついて事を處するのである。茲に始めて佛陀の偉大なる恩寵を感じる。其味は他人は何といふも己には非常なる力のあるものである。昨日會ふた人が曰はるゝには、今日の私には世界の物か皆佛の變化である様に思はるゝと、實に其通である。そうなればこそ世界のものが皆吾人を勵ますも

のとなり、道義は自然にこれより生じて来る、茲に至りて始めて眞正の修養が出来る、修養といふも決して自らつとめてするにあらず、自然である。佛を味ふた結果は總ての事辛苦勉勵してするにあらず、たとひ不愉快な事件か来るにもせよ、其時々に應じて自然と修養か出来る様になる。これまで申したのは熱心に求められた例であるか今一人は俗にいふ神系病みといふ様な人で、何ぞといへば人を疑ひ、人を悪しく思ひ、事々に不満を抱くといふ性である、それだから人か言ふてくれる事は、よしそれが眞實の深切であるにしても容易に聞き入れられない、これは最も多い例である。これ等の人は自分からは左程に勉めずして只人を疑ひ、人は何うも己の思ふ様にしてくれない、こうしてはいかぬあゝしてはいかぬ、といふて常に心を苦しめる、そののみならず身をも苦しめて病む、夜も寝られぬといふ有様になる。私は此間此人のいはるゝ事を聞いたか、夫等の事は皆些細な事でも何でもない事であるが、其人の心持になつて見れば小さい事か中々小さいくない、夫故に其人の言はるゝ事も無理ではない。然し自分が人を疑へば、人も亦自分を疑ふので、其人の眞情を樹めば、よし無理でないにしても人は彼を無理こゝとして其言ふ事に反對する、であるから其人は心を苦しめ無いて置かうと思ふても苦しめざるを得ない。私は其人の話を聞くや専ら同情を表して反對せず、私の經驗を述べて置きました。私の經驗は信仰の餘瀝や其他私の著書に書いておきましたから已に御存知である方もありましようが、私は實に此人の如き經驗をしたのであります。人といふものはこちらから向を疑ひ隔てれ

ば隔つる程向も疑ひ隔つるものである。元來人を疑うて居るのであるから、自分が實際心寂しく感ずる時、或は孤立になつた時等には、切角の人の慰も間に合はない、唯一人苦しむ。全蘇人の苦とか不満とか言ふものは多く他人との關係に於て生ずるのである、如何にして生ずるかといへば、元來人は他人に求むる事が多いからである。それであるからこちらが求むる様に他人はしてくれぬ、これが即苦の種となる。私は此苦を嘗め盡して遂に内心に大なる喜を生じ佛の慈悲の廣大なる事を知つた、ここに人間の力の毫も役に立たぬ事を知つた、けれどもそう見限た時に慈悲の光を蒙るのである。これは道理では解らぬ、又唯人の言葉を聞たによりて解るものでもない。全く佛の慈悲である、佛の偉大なる力に依るのである。佛の慈悲に依らざれば眞に自分の悪い事に氣がつかぬ、眞に佛を感じて見れば徒らに人に求むる事の非なる事を知る、己が與へざるものを人も與ふる筈はない、能く考へて見れば是迄は己れが人に對してすべき事をせず人にのみ求めて居たのである、これから私は佛敎の書物を讀むに實に能く解る様になつた。處が今の多くの人は佛を最も能く了解して然る後信仰するものであるが如く思つて居るが決してそうでない、人力極まりて道理を離れ、そこに佛を認むるのである。佛は實に人間の力の及ぶものではない、人間の力の及ばざる處、人間の力の動かすべからざる處を心の奥底に知る、即何か知らぬが何うしてもあざむくべからざるものを内心に認むる、それが只針の先でついた位でも知れて来れば偉大なる力を感ずる事が出来る、人間の極淺薄な考でこれはこうぢや、それで

はいかぬといふて居たのは小さい、冷暖自知大なる慈悲も自ら實際に感じて見なければわからない。私が佛を友人に例へたのは後の事であつて佛を感じた其時は實に嬉しい満足な喜が生じて来る、これを絶對の信仰である、吾人が佛に接するには略斯くの如き經過である。これを一人の人に話して置いて丁度昨日會ひました處が、其人は實に非常なる喜で夜も書もない、そうして日々の仕事も是迄の倍も出来る、自ら何故か不思議でならぬといつて居られた。此等の實例は今日の題を出した後の出来事であるが、信仰は自然より来るものであるといふ事を知るには最も適當であると思ひましたから一應御話致したのであります。此題を出すには今少し深い意味があるのであります。

それは此の前の求道學舎の講話に話しました彼の親鸞聖人の廿一條の張文(前講話筆記参照)と親鸞聖人の信仰の極を顯はした歎異鈔との比較である。歎異鈔の中には如何なる悪人でも佛の力にて救はれる、人を殺したものでも救はれるといふてある、其骨髓は然れば他の善も用にあらず、念佛にまさるべき善なきが故に、又惡をもをるべからず、念佛を妨ぐる程の惡なきが故に云云)惡をも恐るゝな此偉大なる佛を信すれば(善人なほ以て往生すいかに況や惡人をや)、善人は助かつて惡人は助からぬといふならば佛はいらぬのである。若し彼は惡人であるから救はれぬといふならば絶對の救濟といふ事は出来ぬ。絶對といふ以上は如何なる善惡の者をも漏らさぬといふのでなければならぬ。絶對の力はここにこそ顯はれるのである。この歎異鈔の精神と彼の廿一條とが

撞着せざるや否や、といふに決して撞着しない。其所以は先づ我々が佛に接して眞に喜を生ずると同時に心の中に、あゝ悪るかつた、すまないといふ感が起つて強き制裁力を生ずる、これやが道徳徳義を行ふべき力を生ずるのである。此力の生じない様なものならば眞の信仰者ではない、例へば子が親の慈悲を感じるのもろうである。若し茲に一人の子があつて親の手許より金を貰うて費ふとする、費かつては又貰ひ、貰ては又費ふ、そこで子が思ふには親とは實に有り難いものである、親は何時でも自分の欲しいだけ金をくれる、有り難いものである、と感じたとすればこれ其子が親を知つたといへようか、慈悲を感じたといへようか、決してそうでない。何故なれば此の子は唯金を貰う事を有難いと感じただけであつて毫も制裁力を感じて居らぬ。眞に親の慈悲を感じたものならば濟まぬといふ一の制裁力は自から伴ふものである。昔より有名な俗話となつて居る彼の信州の姨捨山の物語は最も味がある。信州に一人の百姓があつた、處が其當時の信州の殿様は何でも古いもの穢いものを大層嫌はれた、人間でも年寄ると穢ならしいから年寄は容赦なく切り殺された。そこで其百姓も年老ひたる一人の親を有つて居たから心配して種々に考へた、遂に親を山へ捨て、殺さるゝ事を免がれ様として、親を背に負つて漸々山路にかゝると母親は行く／＼木の枝を、折りては投げ／＼せらるゝ。子は何故か解らぬ、母親に其理を聞くけれども一向答へぬ、然も尙進むにや、はり前の如くせらるゝ、不審のままにやがて親を捨て、歸る道すがら前に母親の投げて置かれた小枝を傳ひつゝ、安穩に家

に歸るを得て始めて母親の管ならざる深き慈愛を感じてあゝ悪るかつた、今迄は自分は親の慈悲を知らなかつた、すまないかつた、といふより早く再び山に入て母親を尋ね出して家に連れ歸り人目を忍はせて與ふ限りの孝養を盡した。一始め山に入る時に母親の行く／＼折て投げられた小枝は全く息子の歸路を安全ならしめん爲であつた。此百姓は眞の孝子である、私は小さい時親から此話を聞いて居たが時々思ひ出しては自分の事を顧みる。自分は宗教の爲に盡す杯と思つて居るもの、中々親に報ゆる事も出来ない。私の父親の死なる、時に傍に居合せた人々が私の處へ電報を打たうと云はれたのを父が聞いて、いや／＼近頃は定めて彼も忙かばしいであらうからそれには及ばぬからやめといてくれといはれたといふ事である、實に親の子を思つて下さる眞心は深いものである。親は實に思へば此世の道しるべのみならず死後の道しるべをもして下さるゝ、それに係らず私は親の爲には何一とつした事もなく全く此物語の如く親を捨てたものであります。孝行は中々出来るものでは無くて爲うと思つて爲た孝行ならば眞の孝行ではない、孝行は實際己の力では出来るものでない。よし孝行が出来るとした處で、そんなら孝行をして居るといふ人は全體何れ丈程して居るのであるか、極露骨にいへば幾何か金を送るといふ位の事であらう。さて其金は多少成功して居る人であれば少なからざる金であらうが、それとて實は自分の食ひ餘りでないか、自分の食ひ餘りを親に捧げて孝行といへようか。能く／＼思ひ見れば我等の今日あるを得たるは皆悉く親あつて得たるものである、親より得たるものであれば、

皆總て親に返すべきである。實に孝行は身命を捨て、猶盡さざるものである。況や衣食位の供給がどうして親孝行といはれよう。

佛に對するも亦此通りであつて、己は佛に對して斯々の事を爲せり杯と思ふて居る間は未だ信仰に至るには遙かなる道程に居らるゝ人である。眞實佛の慈悲を感じて見れば實に大なるものであつて、自らこれではすまぬ／＼といふ心が出て来る、小さい人間が小さい力でするのである、たとひ一代の間か、つても何れ程の事が出来さしやう、人生五十年間の僅かなる事業、何れ程の事を爲れはとて、遂に小さいものである、それに佛の偉大なる力を感じ來る時は愈自己の小なる事を感じる。然れども一旦信仰を得たるものは自己の益々小なる事を感じる。同時に益々佛の偉大なる力の加はる事を感じる、これ古來信仰者の深く窮迫に處する所以である。親に對する孝行も佛に對する行爲も皆總て信仰の上より自ら來るのである、こゝには信仰と戒律との關係の最も味ある處である。世間の所謂律法的の道徳は、一應は尤なるが如きも人間か最後窮する時は何にもならぬ。それで昔より宗教の興りたる時の如きは律法的の道徳は皆多く破壊せられて居る。姨捨山の話も信仰の上より見れば愈深い味がある、而して歎異鈔の味は亦こゝである。これを以て見れば信仰と制裁、信仰と道徳とは決して撞着せぬといふ事が解かる。處が歎異鈔の第十三章を見ると聊か撞着して居る様に見える。十三章は即ち彌陀の本願不思議におはしませばとて惡をれそれるは、また本願ほこりとして往生かなふべからずといふ事。この條本願をう

たがふ善惡の宿業をこゝろをざるなり、よきこゝろの起るも善業のよほすゆゑなり、惡事のおほせには兎の毛羊の毛のささにあるちりばかりもつくるつみの宿業にあらずといふ事なしとしるべしとさふらひき、(乃至)當時は後世者振りしてよからんものばかり念佛申すべき様にもひ、或は道場にはりぶみをして、何々の事したらんものをば道場へ入るべからずなどいふ事、偏に賢善精進の相をほかに示して、内には虚假をいだけるものが、願にほこりて作らん罪も宿業のよほすゆゑなりされば善き事も惡しき事も業報にさしまかせて、偏に本願をたのみまいらすればこそ他力にては候らへ云々。此文の中にあるはりぶみといふのは歴史的に考ふれば前申した廿一條のはりぶみの事であるが、これは勿論律法的のものに非ず全く信仰後のものであるが、茲の處では信仰後は別に個條的のものに非ずといふ意味をいふたのである。親鸞聖人と他の人と二通りに別れた處である。基督教杯でも同じ點でポールの慈愛主義と其他の戒律主義との二通りに別れたのは勢の止むべからざる處である。つまりこれは一方で佛の慈悲をいへば、どんな人間でも救ふ、然れば別に個條書杯はいらぬ筈である。然し佛の慈悲を感じて猶ほ惡をするものは本願ほこりといふもので、恰も親は幾何でも金をくれるからといつて無暗に金を費うのと同じ事である。要するに歎異鈔の著者の意は、先づ佛の慈悲を味うて見よ然らば自ら行くへき道か知られるといふ意味である。最後に歎異鈔の十六節には(信心の行者、自然に腹をもたて、惡様なる事をもあ

かし、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、必ず廻心すべしといふ事。この條斷惡修善の心か、一向專修の人には、廻心といふ事唯一度あるべし。實に仰けは愈高く、たゞけは愈堅く、味へは味ふ程尊い。人生一代の間に於て自身の惡るいといふ事に氣がつく時は度々あるけれども、眞實佛の大慈悲を感じて、絶對の信仰に入り長き過去に於ける罪惡を懺悔するは唯一度である。而して此懺悔こそ自ら道義を行ふべき力の源である。これ親鸞聖人が晩年に於て最も力を用ひて説かれたる自然の意義である、此自然にして計ひなき處が道義の源泉であるといふのが歎異鈔の骨目である。近頃は頗る世間が騒々敷き様であるが、これも自然の然らしむる處により正しき處を行つて行かぬはならぬ、それには一個人の信仰の力は正さしく社會國家の力であれば此際個人一人に益精勵を加へねはならぬ。(九月九日)

- 昔有女人、 遊遊他國、 抱所生子、 力不能前、
- 波院伽河、 其水暴漲、 以是慈心、 色究竟天、
- 愛念不捨、 母子俱沒、 即得上生、 於諸世間、
- 善根力故、 即得上生、 色究竟天、 悲母在堂、
- 作大梵王、 善男子、 悲母不在、 名之爲貧、
- 何者最富、 何者最貧、 悲母不在、 名之爲貧、
- 名之爲富、 悲母不在、 名之爲貧、 悲母死時、
- 悲母在時、 名爲日中、 悲母死時、 名爲月明、
- 名爲日沒、 悲母在時、 名爲閻夜、 《心地觀經報恩品》
- 悲母亡時、 名爲閻夜、 《心地觀經報恩品》

肉に汗や膏をそぎて咬ふのである、亦坊主の着る法衣は錦繡綾羅にあらずして、愛惜の濼測して居る皮に血をもて模様を織り出したのである、殊に本山の絞る財寶は實に恐ろしいもので外に柔和忍辱の相を装うた強盜と同じであると考えた時、私は五臟六腑が煮えかえる様であつた。このいまはしい寺院に生れて骨も肉も皮も血も不淨財の凝り固つたものであり、又着物にはなまの肉片がついて居り生血が滴る様で、起つても坐つても居られず、遂に私は報謝の權化となりて東西兩本願寺を烏有に歸せしめ、幾万の地方寺院を廢滅せしめ幾十萬の坊主を餓鬼になさんと決心した。そこで私は世界に漂遊して人世の苦海をたゞよひ人心の奥底を叩きて一大宗教を求めんとして、父母の家を脱走して諸所をさまよふた。斯くの如く私の希望は高峯岳山の様であつても、地盤が泥土の如くであるからわけもなく失望の深淵に蹴落とされた。此の時私は深い深い光のない恐ろしい谷底に落され、いばらの中に入れられ身動きもすると肉も皮も千々にせられる様に思ひ苦しみを初めた。私はこの苦しみの化石の様なやつた殘骸を抱ひて動き初めた。丸ていばらの野草をわけゆく様でこの時は慈悲の福音は惡魔の叫びであつた。圍繞する人事界も自然界も毒蛇の様に考へられ惡龍の様に思はれて、ます／＼深い淵、いばらの野に入るのであつた。自分か心で力を入れればいれるほど沈むのであつた。噫々不可思議なる哉不可思議なる哉、御佛の大願力によりて無碍の光明に照らさるゝや、幾万丈の深谷にあつた私は彌陀の本弘誓願の大光明海に浮べる願船に乗せられる一刹那に、無明の暗が晴れて不可思議なる御佛を

實 驗

信後の消息

如來の智慧海は深廣にして涯底なく、三乗の測り知る所にあらず、唯佛のみ獨り明了せりと。私の芥子の如き心で佛の智慧海に對する時は、不可稱不可說不可思議と驚嘆する外はないのである。五逆罪裡に迷ふも極重惡の巷に入るも、佛の絶對の大慈光は刹那刹那に微極極微に入りみちたまひて無明の大夜にさまよふて居た私を大悲の願船にのせて光明海にうかばじめたまひ、至徳の波靜に來り衆禍の波を轉せしめて、人生の苦海を渡りて無量光明土に至らしめたまふ。噫々如來の大慈悲は有漏の穢身を棄て、靈妙界に於て無上の妙果を得せしめたまふのみにあらずして、此の火宅無常の世界の極微々々にみちみちたまひて、刹那々々に不可思議なる威神力は骨肉にひり／＼徹透し、大奇蹟をこの雜善虛假邪偽奸詐の心の上には顯はしたまひて言語を絶え思考失はれて、唯ぼればれとして懺悔と歡喜と感謝とにこの人生を送らしめたまふのである。

私は二三年前教界の衰微を悲憤慷慨して根本的革命をなさんとした。この時私は坊主の喰ふ一粒一滴は貪欲の化したる

嘆美するばかりであつた。あの阿彌陀如來の自在神力に不可思議せらるゝ一念の間に叢林棘刺の野原は消滅して百花咲きみだれた花園となつて、柔軟な微風の送り來る異香は惡に凝りかたまつて居た肉をとき罪に汚れて居た血を清められた。此時の私の刹那の思ひ／＼は一々拭はれ御佛の不可思議力に感泣するばかりであつた。私は無始以來の無明の心識は一念須臾の間に於て無碍の光明中になげこまれたのであるから、過去の罪惡に慚愧し御佛の慈光に歡喜する極み、私は自分忘れ社會を忘れ唯懺悔と感謝とばかりであつたが、其後漸次と三毒五慾の惡魔は續々と間斷なく襲來した。されども一乘海の至徳は利劍の如く利鋸の如く利斧の如く無明の大樹も煩惱の苦枝も悉く伐り拂ひ、衆魔と共に慈光を味ひて生死の難度海を渡らしめたまひ、靈妙不可思議の城に入らしめたまふのである。

斯くの如く不可思議の靈威力に驚嘆せしめたまひ、廣大深遠なる御佛の慈愛にあこがれしめたまひてより三四ヶ月の後京都に來た。私の力で來たのではない、事實を云へば京都へ來るのは惡魔の巢窟へ入れられる様であつた、蛇蝎の洞穴へ行く様に思ふのであつた。

私には佛陀圓融の至徳は安養界の無上妙果を證する大善大功德を欣求するばかりでなく、この一刹那刹那に御佛の不可思議の大加威力を味はしめたまふて、此の火宅無常の世界に於て御佛は我が如き罪の子頭に彼の靈界不可思議の密の如き至徳を味はしめたまひ、又不可測の佛智はこの惡業の凝りなせる私の一舉一動の上に一大奇蹟を實現せしめたまひて、



無慚無愧の木石の如き心を一念一念に粉碎して慈光にほれぼれせしめたまふ。噫々無碍無邊最勝深妙不可稱不可說不可思議の佛天の御計ひは晝夜永劫求むれども其の味をあらはず詞なく唯佛の外には知りたまはないのである。

私はあの佛天の御計ひによつて五月二十三日京都六條に來た、此所は恐るべき毒を流して居ると云ふことは、一度六條に居つたものは決して疑はない事實である。若し人類中腐敗墮落の標本をとらんとするならば、若し破倫沒徳の好材を求めんとせば、此所に來ればよい、私はこれ以上云ふことは出來ない、私は自分の身を動かせば人類以下の動物に觸れねばならない、恐ろしいこの巷が日本佛教界の中心である。嗚呼佛の智慧海は思考を絶するばかりである、私はかゝる巷に於て御佛の慈光を深く深くいよいよよろこばして頂くのである、京都へ來て三十日にならない六月十七日に、ふとした事から日曜學校を初めんと決心した。實はさゝいなことから思ひついたので京都へ遊び來て居た早稲田大學の學生で、丸で今迄知らなかつたがふとした事で出會ふた。一瞥した時眞面目な眞摯な熱烈な風采であつた、互に一言話せば千言證り直に親しい友となつた。初めて私の所に來られて話は宗教上のことになり、一言一句骨あり血ありて實に當時稀な満悦を極め散步の快を貪り、話は日曜學校のこととなり、私は六條に活ける信仰を以て日曜學校と求道會を組織したいと云つて大に賛成せられた。そこで私は思ひ立つと直に實行するのだと決心して、一人の知己もなく一ヶ月も居らない上に年少で智慧も才能も何にもないにかゝはらず、一切思考計畫もなく只

目には福高君は御佛の慈光に接して靈感の極まり席上に斃れられた。第四回目に日曜學校は此の地の古き名をとつて淳風日曜學校と命名して開校式を實行した。そして佛陀は我等の校長なり信仰は我等の校則なりと規定したのである。この二つの御佛の事業は漸々盛大となつて今度日曜學校は八回で告白會は十回である、去八日に近角先生が京都市聯合佛教青年會の夏期講習會に講演に來られて私共の告白會の求道者は非常なる御佛の慈愛を味ふたのである。告白會は各自の心の内をさらけ出して御佛の慈愛を味ふのである。

或る人は自分の親しい友がふとした事からクリスト教信者となつて後、しきりに眞宗の教義を問ひ且つ佛教僧侶の無能を攻撃した、て靜に自己を省みれば佛の慈光は疑の内に包まれて居る求めんとすれども求められず、考へても考へられず遂に考へれば考へるほどわからなくなり、最後に苦が苦を生じて身圖のすべつてのものが皆苦悶煩悶の種となりもう堪えられないと云うて涙ぐみて求道せられて居た。幸ひ近角先生が來られて講話のある間一度も欠かさず聞かれたが、丁度夏期講習會の終る二三日前に召集令が來て五六日の内に歸へらねばならぬと云ふことになつた。いよいよ生死の間に行くのであるからどうしても慈光に接せねばと云ふて況んど狂人の様に苦しまれ、いよいよ召集の前の日まで求道の爲に居られ其の歸郷せられる前夜は私の處で泣き伏せられて恰も身心熱病に罹られた様であつた。私は此の人が一日も早く慈光に感じあふ力つよき加威力に接せられんことを祈つて居る。

或人は佛門に生れられしも種々なる事情にてクリスト教の

信仰のつて直に其の散歩した足を六條に向け青年の和尙の賛同を求めたら滿腔の同情を表せられたが、身を其事業に投ぜらるゝ事が出來ない。知己一人もなき私共はとりつく島もなく當惑したけれども無理もない、丸で外國で無資本で事業を初めると同じである。しかし其の夜一面識もないが熱心な青年佛教徒があると聞いて直に突然にも訪問して同意を請ふた、不思議にも直に快諾して粉骨碎身佛の爲に働かんと誓はれた、思つて見れば互に無謀極まることである。其の人は私共を知らず私共は其の人を知らず、唯佛の爲にと云ふ確固なる紹介状によりて信じたのである。其の人はこの様に不思議にも何處の馬の骨とも知れない私共を信ぜられて、一方ならぬ盡力をして下されたから計畫した次の日曜日即ち六月廿五日に盛に初會を開くことが出來ました。この日有志から寄贈せられた美しい花は滿堂にみちみちて、四十余名の如來の子等はオルガンの美音とともに清きまるとをうたひて御佛の慈愛を讚美し嘆異鈔を朗讀し、御佛の慈光に浴せしむる訓話お伽噺遊戯などをなして散會した。その時私の心に覺えず浮んだのはこの大切な如來の子、人の愛子を養育する私共は、信仰修養をなさねばならぬと云ふことである、直に同志に計つたら賛同せられたので茲に告白會が開かれたのである。この様にして私共は毎日曜日御佛の御まもりの下に一回より二回三回と繼續せられた、漸々盛大になつて第三回の時には日曜學校は百余名の如來の子が參集し、告白會にも一人二人と増加して十余名となり、來られる人々は實に熱心な眞面目な求道者であつて、各自の心中を殘る隅なく吐露せられ、三回

家庭に於て基督教の信仰の趣味を愛せられ、而かも未だ自己の心に安心立命したまはず、久しく苦しみて居られたが、近角先生が告白會の爲に實に靈感溢れたる慈光に對する自身の實驗を赤裸々に告白したまひしに、この人は堪へ得ずして席上に伏し、遂に逃げ出されて別室に斃れ暫くは言語も絶えて況んど氣絶せられた様であつた。私は此の人の慈光にほれぼれとあこがれて、新生涯に入りたまふことの長くないことを信ずるのである。

或人は元來俗人であつたが放蕩の爲に身をあやまり財を失ひし時其の父君信仰家にて實に佛心の如き心をもて訓誨したまひしに感せられて、佛門に歸せられた、而かも未だ佛の慈光に浴したまはず、この頃涙を流して前非を深く懺悔して佛の慈愛を切に求められてある。其の熱烈なる如何なる苦毒中をも忍びて道を求めずんば止みたまはざる様子には驚くばかりである。

其外無二の友の出征の報に接して自己の精神に悲哀の情せまり求道の念湧き充ちし人、修養の道に苦しめる人などあつて、僅に十餘人であるが其の求道の精神は實にすさまじいもので、たとひ大千世界にみたらん火をもすすぎ行くのは何んてもない様である。そして告白會は實に虚偽も虚飾もなく眞實のさらけ出してあつて、私は君を野心家と思ふとか、又は君の行爲はどうとか、あなたの信仰はあやしいと思ふとか普通の交際の上で云ふたら直に大血戦が初まる様なことを實に圓滿に平和に互の心中をさらけ出して懺悔と告白と感謝とて疑り固められて居るのである。私は告白會の時佛天の加威力

と天光明の中に於て開かれることを疑はない。噫々不思議である不思議である、私は自身に私の心がわかない。御佛の慈光に靈感してから後、度々佛天の御計ひを疑ふた、現に私は自分の芥子ほどの心で佛天の御計ひを思議して煩悶も苦慮もしては身も心も焼かれる様に慚愧の念を起さして頂いて居る。あゝ無始以來無明の闇に生死の苦海に沈没し、名利貪愛の大山に迷惑し眼毒の炎を力にして居た根性は、あの慈愛みち／＼た御佛の御心によりて生きて居るのだ、私はこの日曜學校と告白會とはどうしても佛の創められたのであると云ふとを疑ふとが出来ない、よく静思して見れば不思議に堪へられない。私は佛天の御心不可思議の御力は實に疑はうとしても疑はれない。十方世界の衆生は皆なあの御靈光の御計ひによりて靈妙界に向うて居るのである、その行き道は幾億萬ありともあの慈光を仰いて言語を絶して思議の外に恍惚たるは明である。私は告白會の席上に於て人の心の奥の底の底の秘密を感泣し悲嘆して涙をもて披瀝する時は、佛力利斧の如くにして無明の苦枝を切斷して一步一步あの人達の佛に近きてあるのが眼に見る様に思はれる。

噫々如來の智慧海！私が佛の慈光に靈感していたゞいたこの心は、世界中の人か口を揃へて誹謗するも身は粉にせらるゝも骨は微塵にせらるゝも決して除けられない、十方の諸佛が長廣の舌相にてあざけりたまふも到底壞るゝ事は出来ないのである。如何となればあの他力の中の他力で御佛の智慧海より發起せしめたまひし信樂であつても、いたゞく力がなから不可思議の靈感力によりて與へたまふに私は尙疑惑の

らざる偉大なるものに御座候、御慈悲を言へば惡むものをたすくといふ其眞實阿者か之にしかむ、ソモソ佛陀の境や、之を稱して眞如といひ一如といふ、(宇宙の本體に非ず哲學的說明は後に出來たもの)之を信せしむる第一也、大乘起信論といふに非ずや、信を起さしめ人爲に其佛陀の境界の眞如界の偉大を説きたるもの、其眞如界とは佛陀の境界也實に起信論の目的は修行安心せしむるにあり、さればこそ最後に其佛陀を顯はし來りて西方阿彌陀佛に歸命せよと説き玉ひしものに候、今世の理窟の根本となれる起信論すら此の如し、今世の人起信の起信たるを忘るゝ次第に候、既に此の如く偉大不可思議靈境なりとせば之を信するな信すべからずと言ふも我等は此佛の慈悲を信せずには居られぬなり、此に於てや「信卷」來る、猶ほ一層深く此不可思議の佛陀の境界を知らしむべく我等に事實を以て示し玉ひたるものは彌陀の本願也、

五つの不思議を説くなかに、佛法不思議にしくなき、佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり、後二句獨斷の如くにして獨斷ならず如何に眞如不可思議の境界なるも彌陀如來の來現無くば我等惡凡夫何の處にか救濟の道あらむ、而して此彌陀の本願は不思議なり、其本願不思議は即名號不思議也(歎異鈔十一章參照)持ち易く稱へやすき名號の中何もかもよくまるゝ也、「行卷」に大行とは無碍光如來の御名を稱ふるなり、此行は諸の善法を攝し諸の徳本を具ふ眞如一實の功德寶海也と有之候、眞如一實とは御佛の不可思議なる御徳に候、此の如き我等は何とも解剖す可らざる諸業萬徳の包容せらるゝ念佛に候、聖人が「念佛はまことに淨土に

手をさしのべんとするのである。そうすると其の疑惑の手とともにも圓融至徳の一乘海に歸入せしめらるゝ。あゝ如來の智慧海の深廣なることよ、不可測よ不可思議よ不可思議と云ふも思議するのである、針の先きを幾億萬分したほどの心にてしきりに佛智を思議せしと云ひて思議して居るのである。噫々佛唯獨明了。

### 佛境は不可思議也

近角 常觀

拜啓仕候七月末出立前に差上候手紙は頗る露骨に而も至極簡略なる書面たりしにも拘らずかく迄も深く喜んで被下候御事却て私の方の甚冷淡なるを謝し申候、私事前號誌上に掲載致候通米澤京都を終り木曾路を経て信州にて法を喜び本月一日歸京仕候、多少の疲勞と氣候の爲め數日前平臥致居候處へ貴書拜見仕候、言々句々實切なる御求道の精神顯はれ候へば直に執筆御返事申上度本意に候處當時發熱中にて差控へ二日間平臥後全快致候へば茲に御返事申上候、前々來の御質問三件には決して無理なる事にては無之私共も相當の理窟をつけ居候へ共夫は畢竟信仰の上より來りたる者に御座候へば信仰の要點が干要と存候、先づ第一番に申上度は佛陀の境界なる者は實に不可思議に堪へぬ事に候、第六號の不可思議論は親鸞聖人の「行卷」の意味を闡說仕候次第に候、平らく申候へば總て佛教の上に於て佛陀の境界は實に何ともかとも言へか

生るゝたねにてやはんべるらむ、又地獄に落つる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」とあるは唯ヤケになりて丸呑に信ぜよと強むるにあらざ、上に陳ぶるが如く不可思議の境界、偉大なる御力、廣大なる御慈悲なれば我等がとやかく小さき解剖刀をふりまはしても分るものてなき大なる御境界なる事を言極まりて鑽仰し給ふ御言に候、總じて以て存知せざるなり」と謂ふは我等の解る境界てなき事を仰せ給へる言に候、さればこそ「行卷」の最後には最勝眞妙不可稱不可説不可思議の至徳を成就し玉へりとの給ふ次第に候、而して遂に言極まりて讚嘆偈頌の言に相成候もの日々讀誦する正信念佛偈に御座候、己上陳ぶる處は佛境、佛徳、佛本願、佛名號の至大至徳なるものに候、

此の如き佛陀の廣大なる境界に對しては前に陳べたるが如く吾人之を聞かば是非共信せざるべからず、信ぜんと勉むるにあらず、信せずには居られぬなり、第七號の「信樂開發論」は其信仰の起り來ることを述べたるものに候、彼論を草して後「信卷」を拜見候處實に「味極なきものに候、御存知の如く其信仰の味は至心、信樂、欲生の三信に有之候、勿論此は信仰の味に有之候へども親鸞聖人は之を本來佛陀の上に存するものにして、夫が吾人の上に與へらるゝものなりとの事に<sup>有之候、至心とは眞實也、即佛陀の眞實也、上に詳説せし願力不思議名號不思議は即佛陀の眞實の體也、佛陀の力は眞實にてあらはるゝ也、而して其眞實は何を以てあらはらずや、即ち慈悲を以て吾人を信じ給ふ事によりてあらはるゝ也、是信樂也、吾人は自ら眞實にする能はず自ら人を信じ人を愛する</sup>

あたはず、佛陀は之を憐みて其眞實にするあたはざるものに對して眞實をあらはし、人を信じ人を愛するあたはざるものを信じ愛し給ふ也、此信や此愛や、唯佛の手に存するものにあらず吾人に下し與へ被らしめ給ふ也、之を回向といふ也、吾人は之に反して少しも他人に與へるといふ心なく、又與ふべき資格もなし、故に不<sup>△</sup>回向といふ、嘗て私が苦悶に陥りし時我若し絶對に人を信じ人を愛せば必ず人も我を信じ我を愛するものなるの理を知りながらも猶ほ自ら思ひ切りて人を信じ人を愛する能はざりき、而して遂に人生の何者も我を信じ我を愛するものなかりき、最後に我を信じ我を愛し給ふ方は佛陀なることを信じるに及びて歡喜愛樂の念忽ち起る、乃ち知る人間には一點も回向心なし、初めて佛陀の回向ありて吾人に與へらるゝ也、是即第三の欲生也、敢て貴氏に質す、貴氏は自ら眞實にせむと試むるにあらずや、自ら佛を信じ佛を愛せむと試むるにあらずや、自ら他に與へむと試むるにあらずや、是れ吾人が無始已來失敗し來りたる所以にして未來永劫亦其効なかるべし、兄よ、き、給へ、我れ眞實なるに非ず佛陀は眞實也、我信ぜんと企つるにあらず、佛我を信じ給ふ也、我佛を愛せんと企つるにあらず、佛我を愛し給ふ也、我に一厘一毛與ふる心も資格もなし、人生未來皆佛陀より賜ふ處にあらずや、此の如く佛の眞實信愛回向ありて初めて吾人暗黒胸中に信仰を生じ來るにあらずや、即眞實信愛欲生を生じ來るにあらずや、故に信仰は徹頭徹尾佛力也、一點の私も加ふべからず、私は貴氏が此書一讀の上は信すべからずといふとも信ぜず居られず、理論を用ゐよと迫るものもあるも佛の不可議

境の人間の理窟已上たることを知り給はむ、と信じ候。

全体私は實驗といふことを常に主張すれど實驗せむと欲して而して實驗するにはあらず、佛の偉大なるをさかば信ぜざるべからず、實驗せざるべからず、さればこそ聞其名號信心歡喜と云へり足に力を入れずとも地盤さへ固ければ安心して全身を托して自然立脚地固き也、貴氏よ、我心の快きと否とに心を用ゐる勿れ、佛心の眞實信愛なるをたのみとせよ、佛を頼みとせば力を用ゐざるも全身を佛に托するに至らむ。

猶ほ上來陳べ來りたる事によりて念佛は全く佛力を示せる偉大なるものにして正信偈は聖人が胸張り裂けむばかりの讚嘆なり、正信偈を拜誦し念佛するは何より結構なる事と存候、私は御病中是非佛前に禮し給へと迄は申さず候も從來の如く御念佛なされ候事望ましく候、彼歎異鈔の第二章の親鸞に於ては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別に仔細なき也と、信ずること肝要也、何を信ずるや、曰くよき人の仰也、よき人の仰せとは如何なる仰なりや、曰く念佛して彌陀にたすけられまいらすべしといふこと也、之を信ずる外に別のことなしといふは其通り常に念佛し給ふことにあらずや、信ずることは肝要也、夫を信ずるといふは即其通りに念佛することにあらずや、親の命に従ふこと肝要也と言はゞ然り命に従はむと心定まるのみにあらず、寧心定まることは既に一々是れ命是れに従ふことにあらずや、私は貴氏が念佛を稱へ給ふ事を望むもの也、かく言へばとて私も澤山念佛の數を稱ふるものにあらず、されど始めは念佛をさほどと思はざりしも上記の如く念佛には何事がある

### 秋風書信

近角先生足下、私共は誦て一書を呈し厚く先生に御禮申上候、私方武吉儀久數病中に打伏し居候ひしに本年四月頃より一大煩悶に陥り、如何にしても安慰を得る能はず、唯だ快々として苦み居候ひしも、私共に於ては如何共致方無之、精神の修養や慰藉には讀書に勝る工夫あるまじとて、其れにふさわしと思ふ書籍や雜誌など相勤め申候得共、武吉は斯る書籍や雜誌は唯だ一時の清涼劑に過ぎずして、到底われをして永く大安慰を興ふるに足らずとて、只管苦惱を増すのみに有之殆んど類死の状態に陥り申候、斯くて遂に先生を煩す事と相成候處、先生より懇ろに御訓諭被下候段厚く御禮申上候、御座候にて彌陀の廣大なる御慈光に攝取し給ふことを信じ、近頃は全く踊躍歡喜の念に満され居候處、先生の第二回の御教訓去る廿日午前八時廿分相届き直に拜誦致させ候時などは、誠に御叮嚀御懇切を極めたる御慈みの深きに感泣致候、其れより求道貳卷四號社説を私に讀ませ、歎異鈔を拜讀させ絶えず御名を唱へて御慈悲の限りなきを感謝しつゝ、翌午前三時廿分眠るが如く冥目致候、私共其臨終の餘りに平安なるを見て誠に嬉しく相別れ申上る事有之候、之れ誠に先生の御訓導に依て彌陀の救済に浴する事を得たるものと私共一同誠に感謝の至りに不堪候、茲に厚く御禮申上候、敬具

九月廿四日  
父 武右衛門  
母 豊  
兄 豊

かはしらぬが、佛徳の塊なりと考ふ、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はそらごとたはこどもことあることなきに念佛のみぞまことにこそあれ」と、御座候にあらずや、未だ信仰に達せざればとて決して念佛を疎にすべからず、聖人の和讃に曰く、

信心の人におとらじと、  
疑心自力の行者も  
如來大悲の恩をしり、  
稱名念佛はけむべし、

と有之候、御病中長々したる手紙差上げ定めて御疲れと存じ候へ共御來示の御熱心に對して覺えず披瀝仕候必ずや大悲光明の御照しによりて御心の開け來るとを確信仕候、御佛の御慈悲には、まれつゝ御全愈の早からむことをのみ奉願候、聖人の御消息に曰く、唯誓願を不思議と信じ、又名號を不思議と一念信じ稱へつる上は何條わが計ひをいだすべき、き、わけ知りわくるなどわづらはしくおぼせられ候やらん、これ皆ひがごとにて候なり、唯不思議と信じつる上はとかくの御はからひあるべからず候、往生の業には私の計ひあるまじく候なり、あなかしこく、たゞ如來にまかせ參らせあはしますべく候、穴賢々々」と、實に佛智海は御互の測り知るべからざる次第に候、唯廣大無邊の御慈悲を喜ぶの外無之候、頓首

十月十四日  
近角常觀

福元武吉様  
御病床下

拜啓、世は今や修道の好時節と相成候、先生には相變らせられず不可思議の佛力によりて、德音の宣布に御盡粹の段欣賀の至りに奉存候、邦家多事教界また多忙の秋に當りて、生は敬愛なる道兄中川惠亮君の計に接して、君が生前に於て最も敬慕せられし先生に之を傳ふるに至りたることを悲しむもの候、兄が少年時代より秀拔の才能と透徹せる頭腦を有せしことは、兄を知る多數の同窓の已に嘆稱する處に候へば、今更生が彼是申上ぐるの要を見候へ共、兄が晩年に於て

眞摯なる求道者として、殊に最も熱誠なる先生崇拜者の一人として、生は先生に之を傳ふるの義務あるものと存下候。生は兄と交りを始めしは一昨年の秋眞宗大學寄宿舎に於て同室せしに始まり候。爾後君が行住坐臥信仰深き態度は生が最も敬服せし處に有之候。兄は性嚴にして剛にて候。されば信仰も頗る堅實なるものにて有之候。しが、大乘非佛論の稱道されてより、痛く兄が舊來の信仰に動搖を來せし様子に相見え候。兄が屢々圖書館に通勤刻苦せしは一に之が解決を求むる爲なりしが、矛盾は疑惑となり煩悶となりて、遂に御承知の如く昨冬懇恩講道夜席上に於て深痛なる絶叫を發せられし次第と被存候。されど病を獲てよりの兄は獸の人となりて再び苦悶を語らず、光風霽月程の專稱念佛行者と相成られ候。兄は常に師を以て「最も親鸞聖人を知れる人」として敬慕致し居られ候。眞宗大學の信仰談話會を最も喜びし人は兄にて候。君は求道の人なりしと共に護法の人にて候。教界の時事を痛觀して門末の薄信を慨するや、實に天を衝く意氣有之候。敬處なる君より見れば誠に左も有るべきことと存下候。晨朝生等の未だ睡れる時より已に机上清冷なる晚氣に浴ひて御文を拜讀し、まゝ案を打つて點頭し居られたることと認め候。夜半床を離つて嘆異鈔を三四十回も熟讀せられたることと度々有之候。君が門信徒に對する熱誠はまことに青年僧侶の龜鑑とすべきことにて候。今度生が歸郷の爲め分るゝに望み、兄は最も熱烈なる語調にて「救済は事實である事實である」と繰り返されし、兩中大塚停車場迄送り來り給ひし君は、遂に此語を残して此世を去り給ひ候。佛今現在に君をつゝませ給ふことを信下候。悲哀の極み文を成さず候へ共、追慕の餘り申上候。君が御靈吾等を導き給はんこと信下候。佛師を護らせ給ふことを感謝仕候、敬具

九月九日

長澤 論道

三

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、不思議なりけり、不思議なりけり、近角先生、ほんに御不思議さまであります、願力は御不思議佛智は御不思議、御慈悲は不可思議、何處までといふ極ばまりましまさぬ、嗚呼おありがたう存下候、ほんとに世界の事一切不思議に候、私は兼て邪見なる事なら鬼につり取る、愚なる事なら虫にも劣る、かゝる悪人の私が此の儘なりてどうもせずして未來の佛果を期して樂しむのみか、此世では諸佛菩薩に晝夜不斷に百重千重取圍れて御守護を受け

雜 錄

斷 腸 錄

近 角 常 觀

○我が従兄東溪大歡兄は八月三十一日既にポイツマウスに於ては講和成立しつゝある時、葛布嶺に於て敵と對抗中、十三名の兵士をつれて斥候兵として敵地に入り、敵と衝突して奮戦し、敵彈左胸部に命中するや、直に部下に號令をかけ、自分は笑顔を含み、西に向て念佛三稱して瞑せられた、兄は血族として従弟なれど、我と同年生れて、幼少にして両親を失ひ、我父母が我と同様に育せられたので兄弟よりも親しく言はゞ雙子同様であつたのである。

○人間といふものは自己直接でなければ何事にも感じが薄い、日露開戦已來十萬の同胞が身命を犠牲にして奉公せられたことは常に同情に堪へぬ次第であつたが、自己の血族に戦死者が無い中は十分に其傷みが分らぬ、此度自分の兄弟同様の大歡兄が最後に戦死したので日露戦争なるもの全体が私に深き大なる意味を持來たした次第である。

○親を失うたものでなければ、他人の親の死を察することが出来ぬ、現に兄弟同様の大歡兄を失うたる我は確かに今回の戦争に殉せられたる十萬人の家庭遺族の人々に向て十分に

つゝ御浄土の道中、右を眺めても雖有く、左を見ても嬉しく、獨りぼく／＼喜んで居ましたに、此度は亦道失ひの最勝が佛祖の御慈悲の綱を破りて、法律を學ぶとか、判官になるとか、云うて上京致しましたて、娘と共に宿善任かせとは謂ひながら、云ひ出しては悲しみ、悲しみ合ふては又、追付け救へるはと喜び、悲しみの中にも想ひやり／＼暮して居候處、大病下や死去下やと聞きまして、彌々地獄に落ちしかと悲しみのあまり絶倒致候次第に候、然る所誠に／＼不思議々々々、御佛様の御慈悲の綱は何處へどう張りてあるやら分かりませぬ。近角先生を以て此の御慈悲を御届け被下しとの御事、近角先生よくま御浄土へ送り届けて被下した、地獄に落ちたと悲しみのあまり打倒れしに引繼へ、此度は御浄土へ所變へして喜び／＼往生したと承はり、嬉しさ餘りて打倒れ娘と共に思はず知らず後に見れば近角先生々々と叫んださうであります、今も日々東に向つて拜し上げ、先生の御恩と佛祖の御恩と離れぬをば喜ばせて頂いて居ります、此の御恩を思ふにも唯南無阿彌陀佛の外ありませぬ、何卒御法林御大切に幾久しく御導き下さる様願上候、行儀も作法も存下ませぬ老婆の失禮の言重々御高免願上候、  
黒田最勝老母拜

- 在家能招煩惱因、出家亦破清淨戒、
- 若能如法懺悔者、所有煩惱悉皆除、
- 猶如初火壞世間、燒盡須彌並巨海、
- 懺悔能燒煩惱薪、懺悔能往天路、
- 懺悔能得四禪樂、懺悔兩寶摩尼珠、
- 懺悔能延金剛壽、懺悔能入常樂宮、
- 懺悔能出三界獄、懺悔能開菩提華、
- 懺悔見佛大圓鏡、懺悔能至於寶所、

〔心地觀經報恩品〕

哀悼の意を表することが出来る、今後出來得るかぎり傳道して東溪君を初め此等の人々の英魂を吊らひたいと思ふ、確かに我々内地に居て傳道して居るものは出征諸士に對して盡し様が足らなんだと深く感ずる次第である。

○戦死せられたる人々の背囊中に信仰の余瀝のあつたとは度々承る、又生存者の中にも喜んで見て下さる事も聞て居る、そこで猶一層多くの人に佛様の御慈悲を手渡したいと考へつゝ遂に其事をも果たさなんだ、大歡兄の出立の時『嘆異鈔』の要所々に朱點を施して即是利劍彌陀名號の文句を書きて渡したが君が戦死の時まで膚身を離さなんだことを確信する、兄は我父と同じく『嘆異鈔』を非常に喜んだ人である、回顧すれば三十五年十一月二十八日に認めた嘆異鈔第二節親鸞聖人の信仰なる文章を當時の雜誌に戴せたとき、諸方より禮狀を頂きたことを記憶するが、第一番に來たのは兄が心からの歡喜と感謝を以て満たされた「はがき」であつた、後にて聞けば一讀して涙に咽び、あまり嬉しくて之が爲めに報恩講三日間の説教が出來たと話された。

○彼文章は父も非常に喜んで下さつたのであつたが其次は兄であつた、我父が臨終の時兄を呼びて御前は佛法に心掛のある感心な子であると言ふて兄の顔を兩手で動かして居られたが、兄は小供の様になりて父の動かす如く自分でも動かして貰て居られたが嗚呼一年半の後に父の跡を追うて浄土に參られやうとは思はなんだ、實に「火宅無常の世界はそらごとたわごとまことあることなし」である、定めて今頃は極樂で父と相會して雙方とも無邪氣な話をして居らるゝことである

○父は父自身の死の近づきつゝあるとき私を顧みて御前は  
まだ娑婆が捨てられぬかと言はれて大なる覺醒を感じたが、  
兄が日本出發前に我が弟に送れる書面中に、近頃尊堂の一家  
は佛の慈光に照され、暖き御送光ならんと奉遙察、大賀の至  
りに候、乍去風前の燈なる小生が今日世界を見る事は、過日  
も申上候通り、今死に瀕する小生よりも危き生命を受け給へ  
る人の親屬中に在りはせぬかと日夜念頭を離れず候」との一  
節確かに大なる誠である、而も兄の身を以て之を示して呉れ  
たと思へば何とも言へぬ感がある。

○君が決心は頗る堅きものであつた、召集されたとき既に  
辭世を讀みて我庭の松に寄せて其感慨を洩した、我日清戦争  
のとき無事に歸りて汝を見たが、若し此度も再び汝に見ゆる  
が如きことがあつたら如何に残念であらうと云ふ意であつ  
た、前書面中にも彌々與へられし御佛の利劍を持ち慈光に浴  
し、皇運隆盛なる我天皇の命の下に奮闘一撃、一死國君に報す  
るの時機に接するも近きにあるべくと深く樂み居る事に候  
とあつた、果して讖をなして兄の言の通りになつた。

○兄出發後には今年八歳の女子文千代と夫人とが淋しく留  
守して居られた、兄は夫人に十分の覺悟を示して出られたも  
の、恐くは一寸時間も兄の事を思はぬ時はなかつたであろ  
う、兄の計が戦地より傳へられたとき夫人は勿論文千代が最  
も悲しく泣き止まぬには何人も斷腸に堪へなんだぞうであ  
る、されど小供だけあつて人が寄り集るのを喜びて無邪氣に  
編物をしたり、手鞠を作りて遊びて居るぞうだ。

たらし、君が三年の後、寺に歸りて佛前に跪坐して拜禮を  
したが、萬感生じ來りて深く感ぜられた、さて是より再び一  
寺の住職として門徒を教化をせねばならぬが如何にせんかと  
考へつゝ、勤行をして何氣なく御文を拜讀したが、「夫れ八萬の  
法藏を知ると雖後世を知らざる人は愚者とす、たとひ一文不  
知の尼入道なりと雖後世を知るを智者とすといへり」と云ふ  
所が出たので涙がこぼれてとても讀めなんだと告白せられた  
ことがあつた、此頃から兄は信仰に心掛けられた。

○兄は結婚して一家を形作りた後忽ち日清戦争が起りて召  
集された、此時兄は赤坂の兵營に居られた、我は駒込の櫻觀  
音に居つた、此時私は三日にあへず赤坂に通ふて君と相語つ  
た、今にも當時生別の心持て其情の濃であつたことは思ひ出  
す、遂に愈出征となつて夜青山の練兵場より出發するので見  
送りに行きた篝火の光の間に君が背を撫て、離別をした、此  
時こそは確かに生別の心持であつた。

○兄は初め旅順の方へ行き次に臺灣にゆきた、彼時非常に  
苦勞した坊城大隊に加はつて居た、三個所迄負傷したが武運  
強くして無事に凱旋をせられたのを新橋まで迎へにゆきた、  
兄が列の先頭にある無事な顔を見たときは何とも言へぬ喜で  
あつた、列に連れて兵營に着し、晩餐を共にして健康を祝し  
たときは、何とも言へぬ喜であつた。

○其後兄は文千代を擧げて一家益々睦く、私は本山改革頗  
悶得信大學卒業宗教運動洋行等頗る多事になつて來た、私が  
大學を卒業した歓迎會の時も洋行の送別會の時も兄が常に私  
につきて一一世話して呉れたことなど思ひ出す、かく私が四

○それをつくつく思ひ回せば兄もたしか七歳の時父を失ひ  
十二歳の時母を失ひ、兄が大層泣きたまひし事を記憶する、  
兄が小供ながらかひくしく母の看病をせられしことや、葬  
式のときの事など一々思ひ出す、兄の村と我村との二里程の  
ところを二人が相携へて往復したこと、君が村の鎮守の森や  
河原に常に遊びにゆきしことなど三十年の記憶が一時に眼の  
前に見える。

○兄は父の歿後三年間我家に來りて我父母に育てられ二人  
が同じく父より御經を教はつた、又兄が母の歿後三年間又我  
家に來りたまひて共に四書五經の素讀をした、兄と共に湖水  
に泳ぎにゆきしことや、兄が巧みに木に昇るのを我はイツも  
下より仰いで見て居た事を思ひ出す。

○十五歳の時共に我父に伴はれて、京都に遊學に出た、不  
明通の京都教校の門長屋の寄宿の一室に二人が入られた、  
父が窓の下から身體を大事にせよと言ひ置きて歸國せられた  
が、是が私が二十四年間今日まで外に出て居る初めてであつた  
が、ア、今では父も兄も極樂へ歸てしまはれた。

○其時薄暗き一室に立出の時我母が作りて下さつた、いり豆  
やらかみ粉を二人が味ひつゝ和讀の講義のさらへをして居た  
ことを思ふと我乍ら實に隔世の感がある、君は寺に人がなさ  
ゆゑ久しく遊學することが出來ぬので一年を経て歸國せられ  
た。

○其後私が京都から東京へ遊學する様になつたが恰も兄は  
近衛兵に召集せられて三年間入營せられた、休日には往復を  
した、兄が軍隊生活に入りたのは、確かに大なる修養であつ

方に飛び歩きつゝある間に我老親やら家のことなど全く兄を  
杖とし柱とした、丁度私が運動中長濱別院にて演説したとき  
父と叔父二人と兄と私と五人して撮影した寫眞があるが今で  
此世に残されたものは私一人になつた。

○洋行して歸つて來たときも弟と共に京都まで迎へに來て  
下さつた、叔父の死去の時も父の死去の時も皆兄に任せて凡  
てを便して貰ふた、兄は最善く私を理解して私の心に落付く  
様に、しかも六ヶ布事皆私に代りて處理して呉れた、今より  
考へてみるに私は兄の爲めに盡した分量よりも兄が我家の爲  
めに盡して呉れた方が如何程大なるか分からね、兄は我父母  
が兄を養育したことを深く徳として報恩の至情が頗る切であ  
つた。

○兄は頗る正直學實であつて、しかも察し深く涙脆く、人  
の爲に力を惜まぬ人であつた。何事にも忠實で親切であつ  
た、一般の人の評に彼は眞の僧侶であると感ぜざるものがあ  
かつた、神經病の人を親切に世話して全治せしめたことがあ  
る、兄は音樂を好み、兄が父より遺傳したものを見へて横笛を  
吹くことに非常な伎倆を有して居つた、兄は私が家を形づく  
つたらば東京に來て宮内省の樂人につきて音樂を習はんと樂  
みて居た。

○昨年十一月頃歸國したとき兄が來訪して呉られた、此  
時召集前であつたが、兄は既に決心して居られた様であつた、  
併日清戦争の時無事凱旋したことを想ひ出して、先の時より  
も私は確かに無事に歸らるゝこと、信じて居つた、されど兄  
が出立せんとしたとき隣寺の僧分が送別の爲めに來り、歸宅

後直ちに頓死したる出来事ありて、深く兄をして人世の頼むべからざるを悟らしめた、夫故今になりて手紙を見るとかく書いてある、曰く「何となく勇ましく、肉動さ骨なる心地せられて進む思の押へ難く、此世の事は心物何物もなく、唯進みて退くを知らざる今日の有様に有之、後事は念頭を離脱して、更に愛情といへる念を断ち申候」と。

○兄は鴨綠江軍に編入されて漸次韓國の先きに進み、段々奥に入つた、常に手紙が来たが頗る平安なる消息と信仰の喜とが溢れてあつた、戦地へ書信として「求道」を送りたが非常に喜びて熟讀せられた、兄は實に私の信仰や文章を好みて聞きたり、讀んだりしられた、戦地に在る同郷人が兄より求道を恵まれしとして喜びて来たはツイ先日のことであつた、たしかに前々號の不可思議論はよまれた等である、全體此頃の「求道」社説は教行信證のことを書きつゝあるゆる前々號は「行卷」の真髓、前號は「信卷」の真髓であつた、夫故に此度は「證卷」の真髓といふ順序になつて居た所へ、兄は事實を以て眞實證を示された、昨年三月父の示寂のとき兄と共に之に待りて眞實證のことを深く感じたのであつた、三七日の後其有様を書きたる當時社説の文章を草し終りて之を父の靈前て朗讀したとき、兄は大に感動して喜ばれたが、此度は兄自身が又其境を示して下さつた、本號の極樂無爲涅槃界といふ社説は其所感を書きて遙に兄に捧げた次第である。

○今より思ひ回せば實に不可思議である、八月三十一日は越後高田淨興寺なる祖師舊蹟を辭し、正午頃涼車中遙かに善光寺を伏し拜み、上田に立寄り山極氏方にて求道會に出席し

義は何よりも同一念佛同一信心といふことであつた、講和が出来た、平和になつた、兄の凱旋を歓迎すること日清戦争の時の如くするも近きに在りと樂みつゝあつたに、兄は講和の成立と同時に何の思ひ残す所もなく戦死者の最後として彼岸に往生し、我等は白骨の歸着を待ち受けねばならぬ様になつてみれば三十六年の生涯夢の如してある、唯此間に處して眞實不變の契は同一念佛の一道あるのみである、若し之がなかつたならば迎も人生の意義はない、今や兄は盡十方法性眞如海中の眷屬に入りてにこやかに笑みたまへる様子が見える様な心地がする、南無阿彌陀佛。

○此盡十方法性眞如海を描くのが兄を追悼する所以である、と考へて社説を草した、兄か母君は精微庵妙軀といふたが如何にもふさはしき名である、定めて兄が父母と相會して居らるゝてあるう、否生々世々の父母兄弟同一念佛の人には皆遇ふて居らるゝてあるう、夫につきて此法性眞如海を想像すると同時に實験欄の秋風書信にあらはれてある黒田最勝、中川惠亮、福元武吉の三君を想ふの情切なるものがある、私は斷腸錄の中に此三君の事も言はずに居られぬ。

○三君は生前固より相互に未知の人であつたが苦心をされた問題が皆同一の問題であつた、即ち法性眞如の問題であつた、私は現代青年の多くの人が之か爲めに非常に苦心せらるゝを見て同情に堪へられぬ、皆生ける信仰を求めつゝあるに冷かなる眞如法性の理的説明を與ふことは、パンを求むる人に石を與ふるが如き残酷なことである、殊に中川君と福元君は大乗非佛説の爲めに非常に苦勞をせられた、思へはく

た、然るに何故か自分すら其理由を知るあたはざる程に全身疲勞を感じて堪へられなれた、午後信仰座談を爲し、夜は講話をしたが殆んど魂が消へ入る心地がした、發起人の一人たる宮崎氏が母堂の九死一生の間を勉めて出席されたため、氏の爲に氣の毒に堪へず、翌一日出立の際、親鸞聖人御臨末の御書二通を認めて上げたのであつた、後母堂は之を拜みて逝かれたやうである、今より考ふれば其三十一日は實に兄が戦死の日であつた。

○一日歸京後の身体の具合といふものは言ふべからざる有様で自分では夏季傳道中の疲勞とのみ考へつゝあつた、殊に怪むべきは毎夜葬式の夢を見たことである、甚しきは自己の葬式に自己が列して居たこともあつた、そして迎も筆を取ることとは出来ず、如何にしても文章を爲さぬ、十九日の夜電報の計が来た夢を見た、果して二十日其夢中の實況と心持までが皆事實となりてあらはれた。

○初は夢の如く信ぜられず、漸次追慕の情止み難く、其斷腸痛哭の涙をおさへつゝ書したのが此度の「極樂無爲涅槃界」の一文であるゆへ、必ず文章としては出来て居らぬ、されど同一念佛無別道故ときくときは平素私の信仰を喜び、特に不可思議論を味ひて喜んで呉れた兄は今は大らかに極樂無爲涅槃界の中にありて微笑して私の書きつゝあるのを照覽して居らるゝに違ひない、最早此世では私の文章を兄に讀んで貰ふことは出来ぬが彼世から見ると呉れることは確かである、此世の兄弟同様の契を再することは出来ぬが今は四海兄弟として極樂の眷屬莊嚴の人となられた、嗚呼三十六年間兄弟の眞意

實に可愛想なことであつた、世の先輩たる人は此點につきては深く心を用ゐられんことを切望する次第である。

○黒田最勝君のことは嘗て書きし如く本派の大學林を卒業せられたが法性眞如を哲學の本体とみて、天臺華嚴の極意は此に極りてある、佛も極樂も形容である、ときめこんだが君が佛門を捨て流浪し初められた本であつたやうである、して君が最後に佛陀無限の大慈を今まで知らなんだと涙を流して佛門に歸られた、間もなく其佛陀の膝下に參られた、此頃母堂の書面を受取りて庭訓空しからざるを感ずることである。

○中川惠亮君は眞如は佛陀の智慧であるといふことを言ひて常に佛智海を仰嘆された、君は本年眞宗大學卒業生であつて、學問のみならず信仰の爲に非常に熱心せられた、君が常に言はるゝには「佛は是れ満足大慈の人なるが故に」譯はわからぬが佛の仰せの如く念佛して之を信ずれば間違ないと言ふて常に喜ばれた、夏休暇後君の計に接して驚いた、實に惜むことを爲た。

○福元君は本年一月極樂淨土論に不審を起し、且つ自己の信仰の経過を細々と書いて質問をせられた、二月に至りてやはり宇宙本體眞如説につきて色々説明を求められた、併あまはり理窟の多かりし爲め、何となく返事を認め難く、令弟が求道學舎に來たまへるを幸ひ、傳言をして送つた、本年七月出立前書面を送りて露骨に理窟を斥けて信仰をすゝめた、少しも知らなんだが四月己來餘程煩悶したまひたやうである、しかるに君は私の手紙を非常に喜ばれて代筆を以て九月書面を下さつた、其結文に難遇善知識に幸に逢ふ事を得て、薩摩の

邊陲に生れて、身は病に臥しながら、一篇の雁信によりて御  
 懸篤なる御尊に預る事を得るのは餘程の深き縁と存じます、  
 併し若し不幸にして宿善開發の時期に至らずして死する様の  
 場合に至りましたならば如何に残念でありましよう、嗚呼懸  
 念に堪へん事でありますとあつた。

○君が至誠摯實なる文句には深く私は動かされた、また直  
 ちに送つたのが「佛境は不可思議也」と題した書面である、  
 ア、嬉しい哉、君が御両親の報によりて君は既に踊躍歡喜に  
 満されたまひた、幸だも私の書面は君が生前に届きて讀んで  
 下さつた、念佛も稱へたまひた、御慈悲を喜ばれた、そして嘆  
 異鈔を拜聴しつゝ、往生の素懷を遂げ極樂無爲涅槃界に入りた  
 まひた、嗚呼大歡兄も黒田君も中川君も福元君も皆極樂無爲  
 涅槃界に入られた、嗚呼四海兄弟眷屬無量盡十方無碍の光明  
 中に一味にして冀くば我等有縁の兄弟を導きたまへ、南無阿  
 彌陀佛、

如來月光甚清涼、  
 猶如覆盆月不照、  
 法寶甘露妙良藥、  
 有信服藥證菩提、  
 菩薩聲聞常在世、  
 若有衆生信樂心、

能除衆暗亦如是、  
 迷惑衆生亦如是、  
 能治一切煩惱病、  
 無信隨緣墮惡道、  
 無數方便度衆生、  
 各入三乘安樂位、

《心地觀經報恩品》

歸りくと思ふな汝をと手をとりにて別れし君が今歸

來りむ

吾心静づめかねつも庭萩の風に搖るごとしづめか

ねつも  
 花すゝき立ちても居ても居られねをいかに吾せむ  
 君をこひつゝ

二

子と思ふ、同じ心に。産土の、神をこひのみ。夜  
 のまゐり、朝のまゐりと。千度蹈む、千度を共に。  
 通ひたる、心違ひぬ。事なきて、一人まささく。  
 常末に、一人歸らず。沖つ波、千重の嘆きを。其  
 親の、今する見れば。慰めむ、すべも知らなく。  
 歸る子を、如何にか待たむ。今更に、神し恨めし  
 入の子故に。

いさほしもほまれも何せむ老し身に只まささく  
 其子返さね

村人の送るあかつき駒並べくつはならべて立ちし  
 二人を

人の親のなげきをよそに歸る兒を晝迎へめや待つ  
 はまつとも

嘆 咏

秋 騒

神の心人の望さずがに日露の暇も止  
 みぬ、世は和約にあきたらぬさまにし  
 あれど、み國の爲としあれば、家をも身  
 をも願みず、命の限りをつくしけむ、軍  
 隊の人々、今は吾事果て、各故郷にな  
 づかしき家人に相逢ふの日も遠かり  
 すなりぬと、こしへに歸らぬ人を思へ  
 は人を待つにも迎ふにも、聊か心置か  
 るゝ節もあるべくや、しかしかに武進  
 まさきく還らぬ人なをいかて憂たく  
 迎ふへき、即家なる人々の爲に懷を述  
 ぶ。

秋の野に、置ける白露。白露の、千々に千くさる。  
 世の人の、言は聞ゆれ。理を、をみなは知らず。八  
 百日日を、一日の如く。み佛に、神にこひのみ。  
 まさけくと、待てりし人の。軍止み、歸るときけ  
 ば。萩の花、ゑみさく色をつゝみかねつも。

近き頃身まかりける友をしぬひて作れる歌

ひむがしの海辺にありて得し告げのちよづれとも  
 ふすべもなかりき

都べのくすしがへに吾が行きし時はや君は言も  
 問はさず

うつし世の物のさやりを消たまくと痛たもつとめ  
 て君はこやしけり

君がこと思ひ出づれば夢路ゆく思ひたゆたひせむ  
 すべもなし

思ふことも言はさずありしそれもふにいよよなつ  
 かし吾は戀ふるかも

竹の里人の忌日に作れる歌

見はらしの田端の岡の一つ家にむかししぬびて人  
 つどひけり

庭に入る門に片より萩の花二たもと咲きて雨にぬ  
 れ居り

雨のふる夕の庭に下り立ちて筑波の山のあたりな  
 がめつ

さかりなる秋花見ればみ佛のみ國の人じしぬばる  
 るかも

空よりもかけり行かなむみ心を常臥こやししぬび  
 ましけむ

## 遊 行 日 記

○八月八日

東京出立の際は、大急ぎにて自分ながら可笑かりし、後ればせながら社説が出来たので、小供が手柄したといふ鹽梅なるも可笑し、新橋發車前三分着、車夫の御手柄といふの外なし、停車場に城さんが待つて居て下さつた、しほらし、汽車中にて「良人の自白」をよみて、覺はず腸をえぐられた、同車の人は岡山高等學校の三宅教授、是は城さんの先生、他の一人は同志社の和田琳熊君、この同窓、西洋から歸朝して横濱から乗られた、尾濃の朝ほらけに目を醒まし、三人面白く話して、今朝八時京都着、藤井君例の眞面目にして苦げけした顔して、停車場に出迎はる、宿は予の定宿佐々木、早朝會場にゆく、有志一般頻りに待兼ねといふ様子、無漏田君挨拶に来て、嬉しそうに、難有そうに、例の通り目一パイの涙、松本君の圓滿なる扱、其勢にて一時間餘講話す、題は「現時の信仰問題」といふも、結局親鸞聖人を辨ず、講後獨り大谷の祖廟に詣り、老樹鬱々として石砌葎苦滑かなり、森嚴の氣身に追る、肅みて携ふる所の略文類を拜讀す、京田舎の媪翁小女小供代るゝ參詣す、一老人あ

と仰せのまゝを信するなり、聖人の言ひ玉ひし如く、地獄に落つるも、極樂に參るも、我計ひをやめて唯々御佛の御計ひに任すべし、かく御前のみ事のやうなれど、人間はみな同じことなり、かく話してある我が今夜にも死刑の宣告を受けて居る御前よりも先ちて死なぬともかぎらず、若し我御前より先きに命終らば極樂淨土にて御前を待ちてやるべし、若し御前我先だ、ば同じく極樂にて我を待ちて呉れらるべし云云

退きて能淨院殿に伺候す、また親しく講習會の様子など問ひたまひ、遂に懷舊談に及び、英吉利の田舎の質朴にして、暖かなる家庭の慕はしきことなど話したまふ、此夜常念寺にて講演を爲す、平素教化ゆきとどけるものから、小供青年女子を初め聽衆堂に滿つ、歸路堀河の流清らかに柳の梢風涼し。

○同十日

例の如く講習會信樂開發ののぶ、野々村君も禪的講話をせらる、講後茶話會あり、我出席して直ちに神戸に向ひ、諏訪山、本派説教場に以て公開演説を開く、青年と婦人熱心に聴講せらる、了りて温泉に伴はれて夜親和女學校に於て信仰談話會を開く、少數なれど談益々密に入る、實験の信仰をのべ、釋尊の實験、親鸞聖人の人格及び絶対信仰をのべ、嘆異鈔を紹介し、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚假を懐けば也、「出家の人の法は國王に向て禮拜せず、父母に向て、禮拜せず、六親に事へず、鬼神を拜せず」の文を示す、基督敎の經驗深き某牧師來聽せられ、聖人の絶対不可思議の信仰を味ひ、後に嘆異鈔を繙きて深く聖光を感じたまひぬ。

り、默念頻也、我勤行しましよるかと言へば彼ハイと答へぬ、乃ち廟前の禮拜堂に端坐して恭しく正信偈和讃六首引を勤む、老人之に和す、終りて何れの國なりやと問へは江洲愛知川也といふ、我も亦江洲長濱在也と應へぬ、歸來窓を推せば東山舊によりて我に語るもの、如し、鴨河清けれど今日の暑さ非常なり、浴衣一領流汗身を濕す、萬事好都合、人皆眞面目に道を求む、嗚呼何事も御佛の力なり、自分では少しも譯が分からぬ、感じたるまゝかくの如し、草々、八日夕鶴聲樓にて認む。

夕方稻葉師を訪れ、夜藤井君の寺にて講話を開く、我出席して有縁の御佛を拜し奉るを得たり。

○同九日

講習會にて昨日は罪惡救済を説き今日は絶対他力を説く、蓋し此講習會は豫期已上の盛會にして且つ眞面目なり、是れ京都に於ける市民及び學生の眞面目なる人々集り來れば也、夕方新法主臺下に伺候す、温顔近況の事を問ひ玉ひ端なく上人が名古屋監獄に於て親しく死刑囚を教誨したまひし實験を示したまふ、宣はく、

御前は果報拙くして死刑の宣告を受けられしよし、同情に堪へず、出來得るならば我御前の身體を助けたり、されど法律上の事なれば我力にてとて及ばず、是も畢竟因果應報の道理にてかくなれることなれば深く其理を知らるべきなり、かく此世肉體上の事は致方なけれど、御前の命、未來魂の行衛につきては、たしかに我は救ふことを得るなり、そは他にあらず、唯念佛して彌陀に助けられまらすべし

○同十一日

味爽神戸を出立し、京都に歸り、講習會の最終として「横超涅槃」をのぶ、僅かに四回の講話たりしも現時青年の信仰問題につきて遺憾なく辯じ殊に我心にて假想せる佛陀、行爲の理想とせる佛陀、即定散の信仰が絶対の安心を持ち來たさず、唯一慈愛の光の實験のみが一味平等の信仰に入らしむる點につきて力を用ゆ、果して一般聽衆開悟するもの多かりしは感謝に堪へざる也、閉會式終りて無漏田君等の催せる告白會に出席す、事、實験欄に出づるが如し、稻葉師母堂の葬式に會す、師か孝養の深さだけ夫だけ、師の哀痛の情察するに堪へたり、予の父を失ひし時書を送りて曰く予幼にして父を失ひ、人の父を語るをきいて我父を語るが如く感ずと、以て如何に師が母堂鞠育の力によれるかを知るべし、此夜京華看護婦學校にて講話す、親鸞聖人の人生が信仰の實現なることを述べて今回京都講話の結末と爲す。

○同十二日

早朝本山に參詣し、眞影を拜し奉る、青年有志諸君に送られて七條を發車す、石山に下車し、觀音に詣り、眞に千古の靈場、堂前の老木森々として靜かなる太古の如し、月見堂側に出で琵琶湖を望めば長橋青松恰も畫くが如し、山を下りて河邊の小亭につき中食をなし、汽船にのりて大津に出て、又湖上長濱に向ふ、船竹生島に泊す、八角水晶の清淨土也、舟を雇ふて湖上一里家江に歸る、母上門に倚りて待ち給ふ健容を拜して兒心大に安堵す、侍坐晚餐をいたさき、談笑夜深に至る。



○同十三日 兒膝下に歸寧せば有髯猶兒童の如し、多日の疲勞一時にあらはれ來りて、殆むと起つべからず、終日臥して按摩を雇ふ、而して何等の病あるにあらざる也、夕方に至りて元氣奮に倍す。

○同十四日

本日は恰も舊曆孟蘭盆會に當る、佛前を莊嚴して勤行す、村内大々盆禮に歸る、父上の墓を展し、香華を捧ぐ。

○同十五日

朝、御講あり、信徒相集りて食を共にし、法を喜ぶ也、午後法苑を開く、一郷老若男女悉く雲集す、母上法を聞きて喜びたまふこと限りなし、兒心亦喜ひ限りなし、夕陽田園の間を散步す、伊吹山元として聳え、小谷山麓として茂り、朝日山莞爾として面接す、湖上波靜かに蘆間鷗鷺泛ぶ、笙島咫尺にあらば呼べば應へんとす、家江の風光眞に愛すべし、況んや我が遊びし鎮守の森、我が泳ぎし小瀆一として幼時の記憶を呼び起さざるものなきに於てをや、夜圍幾談笑し、母上と佛前に禮拜す、白毫の恩賜洵に感謝に堪へざるなり。

○同十六日

早朝旅裝して佛に禮し、母上に暇を告げ奉り、出立す、正午名古屋に着し、中央西線路に乗車す、漸く平原を去りて山郷に入り、土岐川の溪流岩に激し、奇景賞すべし、線路流に沿ひて上る、幾多の隧道出入する毎に山益々深し、中津川に着し、宿泊す、旅亭青山に對して聖教を繕き眠る。

○十七日

遙かに鹽崎、康樂寺を眺む、昨年參詣したる西佛房の寺、長野を過ぎて車上善光寺を拜し、豊野に下車す、高梨君來り迎はる、人も道も三年來の舊相識、君に伴はれて舟橋を渡り、犀川に沿ひ、中野温泉に憩ひ其夜飯山布袋屋に宿泊す。

○同二十日

常盤村光明寺に入る、和尚は淡泊人を遇すること切、講習會場は小學校なり、乃ち之に趣く、佐崎君と相會して點禮微笑言なくして情胸に溢る、太田君水野啓二君水野了天君舊知己皆同じ、窓前の山、年々我を迎ふる如し、嗚呼宿世何等の因縁ありてか此の如く來往頻なる、題は「親鸞聖人」住田智見師の作なる聖人の小傳を會員に渡し、主として本典につきて聖人の信仰をのぶ、今後三週間午前の講話我が胸臆を傾けて餘蘊なし、午後は公開の講話をなす、暇あれば信仰を談じ、感湧けば聖教を繕く、七日間光明寺裡の生活恰も一日の如し、庭前の柏樹楓葉影涼しくして夏を忘れしむ、況んや連日雨繁くして寂寞人の心を靜かならしむ、眞個に山寺の淡生涯脱俗の情あらしむ、午後の講話二日は太田村眞宗寺二日は柳原村正行寺、前者は井上興圓師の寺、峨々岳山巒ゆる所、佛閣開く、恰も六角堂夢裏の景に似たり、昨年水野啓二君の囑によりて岡田菊僊君畫ぐところの觀世音靈像に贊を作りしは此寺也、後者は高島圓君姉君の寺、一昨年の時住職健在たりしに昨年既に没後たりし、兩寺とも三年已來法を説く宿縁測るべからず、遠近の老若男女山を越へ、田に沿ふて參詣し來るを見て熱心深く手を感ぜしむ、一度他の學校にて講話し、廿六日最終講話後茶話會を開く、此夜佐崎君と袂を分つ、君

起くれば細雨霏々たり、車を雇うて木會路に入る、大峰小峰皆是清淨身ならざるべき、雨濃にして山色藍の如し、先づ遠山我を迎へ、惠那山右に聳えて白雲麓を繞る溪流之より流れて落合の驛に木會川に入る、是より木會川に沿ふて游る、奇巖怪石の間大小の古松生す、益々深く入りて景益々奇なり、連山悉く檜樹にして鬱々其奥を知らず、雨繁くして白雲前山を蔽ひ、河流奔騰して、白馬空に奔る、駒ヶ岳より落つる溪流水肥えて木會川に會し、滔々として洪水の勢あり、時として波車輪を浸さんとす、寢覺の床の奇勝半は水中に没して唯蓬萊の島水上に泛ぶ、却て趣あり、名物の蕎麥を喫す、木會の懸橋の跡人をして古を思はしむ、日暮れて路遠く、遂に福島に着す、宿泊す。

○同十八日

起きて窓を推せば前山鬱々として綠滴らんとして河水樓下を流れて舟に在るが如し、また車を雇ふて出發す、木會義仲の城墟を訪ふ、義仲神社あり、淵あり深ふして綠なり、巴御前馬を騰らして入水せし處なりといふ、鳥見峠に至りて木會川左に失ひ筑摩川右に生す、幾多の山村を経て桔梗ヶ原を過ぎ鹽尻に着し、篠井線に乗りて嬉捨山に下車す、月を賞せんが爲也、樓上遙かに望むに月鏡臺山上に上りて、下界忽ち明に筑摩川上の水烟漸く霽れて、長沙十里月光流るゝの狀、入をして銀河の上にあるかを想はしむ、月に歩して嬉捨の岩に上り、田毎の月を賞す、地高くして冷氣人に迫る。

○同十九日

朝寺を訪ひ、芭蕉翁の古跡を尋ぬ、乘して車稻荷山を通過

は明日山を越えて越後に法を説くが爲也、君と再會する夫れ何れの日ぞ。

○同二十七日

生駒君に伴はれて、徒歩河を渡り、嶺を踰へ、野澤温泉場教育講習會の招聘に應じて趣く、地は山腹に在りて地形小伊香保の如し、紅塵未だ白雲を染めず、質朴の風愛すべし、片桐氏方に泊す、晝教育會に講話す聽衆教育家若くは青年池田良治氏主として斡旋す、夜寺院にて講話す、予幸に一沐するを得たり、是皆有志諸君の賜にして佛恩深重の恩寵に基かざるはなし。

○同二十八日

野澤を辭して、入力車山を下り河を渡り飯山に至る、晝岩倉氏の寺にて講話す、畧文類の大意を述べて、三週間の講話と相對せしむ、滿堂の聽衆熱心溢れたるに感ずべき也、會後正受庵に遊ぶ、是白隱禪師が正受老人より衣鉢を傳はりし舊蹟、近年高橋泥舟翁遺筆を表裝して保存せしむ、正受老人の坐死の句に曰く、

末後一句。 死急難道。  
言無言言。 不道不道。  
在世自偈を不白其像の上に贊して曰  
者老天生。 太煞顛預。  
舉國僉言。 無分曉漢。  
宗覺の辭世に曰く

了得生前句。 便知死後句。  
二月明月與清風。 萬里絶消息。 喝。

東嶺和尚至道菴主の贊に曰く  
打出四菴主。攝或一野僧。  
老愚堂種火。開夜挑孤燈。

此夜予が宿。布袋屋にて信仰談話會を開く、敬虔感ずべし。

○二十九日 東嶺和尚至道菴主の贊に曰く  
太田君水野君と飯山に於て袂を分ち、高梨君に送られて豊野に至る、途に中野を過ぎて中野館に一憩す、高梨君は昨年我を迎へ我を送り今年我を送り我を迎へらる、同君の真情濃かなる感謝するに餘あり、皆信仰上の交遊より來る所、宿縁洵に測り難し、車窓一揮の間に我去り、君獨りブラットホームに佇立す、相顧みて凄然たり、正午前高田に着す、淨興寺に參拜せんが爲めなり、一山の有志諸君皆迎はる、午後青年諸氏の發起によりて演說會を開く、題は親鸞聖人の人格及び信仰、述ぶる所は教行信證の眞髓、所は是れ聖人が當時稻田にありて筆をとる玉ひし踊躍歡喜山淨土眞宗興行寺靈感胸に滿つ、茶話會を開く、當地舊友多し、太田秀穂君新保寅次君あり、我が隣に住みたまひし合田君の令息四歳なるが其母君と共にたづねたまふ、而して現に最も親しき本年大學を卒業せられたる今井正親君の郷里にして同君予を待ちかねて學舎にかへり、父君來訪せらる。

○同三十日

淨興寺を初め高田に於ける諸靈蹟は予が爲めに特に寶物を拜觀せしめらる、祖廟に參拜し、聖德太子を拜す、當時稻田草庵の本尊たりといふ、本誓寺に光明品を拜し、他にて越後國府草庵の御影を拜す、淨興寺寶物多きが中に、親鸞聖人

二十一條條張文は大に信仰上歴史上の問題として研究の材料たり、他日特に之を論ぜむ、此夜構和成立の報に接す、信ずる能はず。

○同三十一日

雨中諸氏に送られて出立す、車中寂然として上田に向ふ、遙かに善光寺の靈場を拜す、東溪君戰死の日也、上田停車場に着するや山極氏を初め上田女子求道會の人々出迎はる、伊藤氏宅にて午後信仰談話會を開き夜講話を開く、山極氏の其先ち姉君の三子を育する洵に感ずべき也、宮崎氏母堂危篤の狀を語らる、斷腸の想あり。  
○九月一日 東嶺和尚至道菴主の贊に曰く  
上田求道會の人々の親切なる見送りを受け出發、東京に向ふ、碓氷峠にて西洋人澤山に乗り來る、車窓默想、午後上野着一ヶ月ふりにて我門に入る、爾來身體疲勞を感じ、時とじも發熱す、筆を呵して机に向ふと雖、想個れ、文成らず、果して二十日東溪君の訃に接す、追悼の念止み難く、一氣呵成にて此號を編す、從來發行期日に後れ、讀者諸君に辜負するこゝと甚だし、乃ち本號を以て十月分とし畢竟一ヶ月休號となり了りぬ、切に讀者諸君の諒察を願ふ所也。

求道學舎の消息

本年は、求道學舎を開きしより恰も三年、學舎に於て帝國大學の學生生活を完ふしたる人々卒業せられたる年なり、而して何れも適當なる職務につきて活動せらる、佛天の冥祐感謝に堪へたる也。

▲文學士阿刀田令造君は再び京都大學法科に入學して研鑽を深め且つ、一方には京都眞宗中學の囑托を受け歴史科を受持たる

▲文學士萬原運次郎君は奉天府に於て市村鑽次郎氏と共に圖書取調の爲め帝國大學講師の名を以て出張を命ぜられ出發せられたり

▲文學士波岡茂輝君は東京に止りて研究せんが爲に早稻田に於ける清人教育の任に當り、頗る興味を以て之に勉めらる

▲文學士今井正親君は熱心に中等教育に従事せんが爲め、前橋師範學校の囑托に應じ國文科を受持たる

▲法學士穴澤清次郎君は外國貿易の方面に活動せん目的を以て現時穴原商會に於て働かる

▲佐藤要人、杉野三郎、一戸俊策、八十島基の四君は新に入舎せらる、

求道の好期來る

秋高うして清新の氣空に滿ち、求道修養の好時節となり、求道の諸會合は開かれぬ、

▲高等師範學校の佛教會は毎週嘆異鈔の講演をさく、

▲高等學校の信仰談話會は毎月二回求道學舎に於て開かれ、

▲臺灣協會學校佛教會は毎月二回演說講話を開くこととなり其第一回を二十八日に開きたり、

▲浦和師範學校校友會に於ては二十三日近角出席して精神修養上につきて講演せり、

▲日本橋福永幸兵衛氏宅にては店員一同相會して一家に於て信仰上の會合を開くこととなり、

▲眞宗大學内にも求道の爲に金曜日講話を開く、

▲第三求道會は會場を變更して彌殿町の説教場に移せり、

▲求道學舎日曜講話題

- 慈愛の源泉 (九月三日)
- 佛力無窮 (九月十日)
- 信仰は他力也 (九月十七日)
- 四海兄弟 (九月二十四日)
- 罪惡之自覺 (十月一日)
- 女子信仰談話會
- 信仰談話會

▲第二求道會土曜講話

- 慈悲眞實は事實也 (九月二日)
- 信するものは堅牢也 (九月九日)
- 自然の道義 (九月十六日)
- 亂如海 (九月三十日)

文學士吉田靜致氏著「西洋倫理學史講義」、文學士常盤大定氏著「馬鳴菩薩論」、網島梁川氏著「病問錄」、平民社出版「良人之自白」中編、其他二三の好著の寄贈を忝う致し居候へ共、紙面の都合上未だ批評掲載の機を得ず御厚意に當り居候、何れ次第に於て紹介可仕候得共此段御詫ひ申上置候、  
尙ほ此度哲學館大學に於て珍らしき梵語字典出版せらるる由に候、該書は厚名を撰橋易土集と申し古德慧院園樂の編纂になりしもの、由にて今回活字に編寫し廣く好學の士に頒たるべく、次第に候、藏經中の梵語は本書を手にせば悉く明かなるべく、出版は本年十一月實價は一圓二十錢、郵税十四錢、十月三十日前申込は一割半引との事、右依頼により一寸御紹介申置候也、

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁地み去りて、皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を擧げ、胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人に志操清浄なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼、信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年己來、聊か此の時運の必要に應ぜむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舎を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講し、互に心霊の修養に充て、幸に佛陀眞祐、師友同情によりて其期する所空し、此に於て居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なきを擴張し、會館を設立して、懇切なる道友の勧告に従ひ、學舎篤厚なる先輩の指導に従ひ、忠實なる親友の贊助を仰ぎ、幸願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ず事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進むることを欲す。是先づ本會館の建設を全圖して佛敎者一般の需要に充て且つ清潔なる社會の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得れば幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月

發起者 近角常觀

求道會館設立喜捨金

受領報告(第拾回)

- 金壹圓也 (即納) 東京 中尾 一 郎殿
- 金壹圓也 (即納) 越中 藤岡 惠 舜殿
- 金壹圓也 (即納) 信濃 水野 了 天殿
- 金貳圓也 (即納) 信濃 水野 啓 二殿
- 金壹圓也 (即納) 福島 七島 武 子殿
- 金五圓也 (即納) 信濃 山極 松 濤殿
- 金壹圓也 (即納) 大阪 城榮 太 郎殿
- 金壹圓也 (即納) 酒田 鈴木 義 舍殿
- 金壹圓貳拾錢也 (即納) 日本橋 福永 幸 兵衛殿

小計拾四圓貳拾錢也

通計千百六拾九圓八拾八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候茲に謹んで感謝し奉り候也

思想界の燈明臺。修道者の好侶伴。

月刊 無盡燈 第十卷 第九號 九月一日 發行

誌代!!! 一部金拾錢—半年五拾五錢—壹年金壹圓

- ▲眞化佛土論……………(中島覺亮)
- ▲宗教的經驗の種々……………(福來友吉)
- ▲火のあつきを疑はず……………(住田智見)
- ▲苦痛は業報、佛恩なり……………(金子大榮)
- ▲梵本法華經和譯……………(南條文雄)
- ▲論語靈感……………(諸同人)
- ▲敎界新著月旦……………(舟橋水哉)
- ▲永劫の暗壁を打破せよ……………(鳳 溪)
- ▲先徳餘香……………(南條文雄)
- ▲思潮概観……………(木居生)

發行所 東京巢鴨眞宗大學内 無盡燈社

思想界の革命兒

本月十日刊



第七號

△毎月二回發行△一部二錢一年四十八錢(郵税不要)郵券代用  
一割増△見本往復端書

- ▲無我愛は個人をして直に絶對的眞理絶對的幸福絶對的自由を獲得せしむるの道也
- ▲無我愛は自己の運命を全く他の命に任せ同時に全力を献げて他を愛するの主義也
- ▲無我愛は既に宇宙と同化して至眞至樂の理想郷に到達したる無我苑同朋の確信也

- 卜翁の天國觀
- 無條件的和睦
- 敎育家爲政治家に警告す
- 答舊佛敎徒
- 二派の自力主義
- 吁十万の學生
- 慘又慘
- 傳導行
- 現代坊主氣質
- 苑樹鳥語
- 無我苑生活
- 僧侶の自白

發行所 東京巢鴨 無我苑

●●●●● 勤行に此書なきは信者の佛壇にあらす ●●●●●

寶重珍寸

字活形新號四

新式眞宗聖典全

德七の典聖本

一、勤行用書の完集  
二、美裝製本の修正  
三、紙質印刷の精良  
四、校訂正謬の厳密  
五、近世活字の鮮麗  
六、四號活字の贈品  
七、近世流行の贈品

目書教聖入編

- 正信念佛偈
- 善光寺和讃
- 御代々命日
- 三誓偈
- 御文三帖十三通
- 文四通
- 識御書
- 川法語
- 淨土和讃
- 回向文
- 伽陀
- 御文一帖目十五通
- 御文二帖目十五通
- 御文三帖目十五通
- 御文四帖目十五通
- 御文五帖目十五通
- 御文六帖目十五通
- 御文七帖目十五通
- 御文八帖目十五通
- 御文九帖目十五通
- 御文十帖目十五通
- 御文十一帖目十五通
- 御文十二帖目十五通
- 御文十三帖目十五通
- 御文十四帖目十五通
- 御文十五帖目十五通
- 報恩講私記
- 嘆徳文
- 御傳抄上下
- 善知
- 往還回向文類
- 離山の御文
- 與御書
- 横

● 上製 總希クローネ表金文字入  
● 正價八拾錢 豫約五拾錢 郵稅拾錢  
● 特製 總黑色皮卷表金文字入  
● 正價壹圓貳拾錢 豫約八拾錢 郵稅拾錢  
● 豫約期限 明治三十八年九月三十日限  
● 見做さす

便輕新嶄

版四第

法藏館編纂

眞宗聖典全

● 法事供養佛前莊嚴には最も良き贈物也 ●●●●●

● 上製 總布クローネ表金文字入  
● 正價五拾錢 豫約價卅五錢 郵稅四錢  
● 特製 總黑色皮卷表金文字入  
● 正價七拾錢 豫約價五拾錢 郵稅四錢  
● 豫約期限 明治三十八年九月三十日限  
● 金の順序により送本す  
● 附に非ざれば豫約と見做さす(求道發行所にて取次致候)

新版出約豫典聖名假新

●●●●● 家に百萬の財産よりも本書一部を藏せよ ●●●●●

嶄新美裝

文書傳道會監修

新式眞宗假名聖典全

● 堅四寸四分 五號活字 用紙舶來ゴロニ上等  
● 横二寸二分 片假名附 印刷鮮麗一千三百頁

豫約期限

● 明治三十八年九月三十日限  
● 製本明治三十八年十月下旬より着金の順により送本す  
● 期限後

編入聖教書目

● 淨土三經往生文類  
● 唯信抄文意  
● 御消息集  
● 敬異抄  
● 口傳抄  
● 改邪抄  
● 執持抄  
● 本願抄  
● 最要抄  
● 出世元意  
● 拾遺古傳  
● 蓮華經  
● 諸神本傳  
● 破邪顯正抄  
● 教行信證  
● 大意顯名抄  
● 本智抄  
● 存法法語  
● 持名抄  
● 女人往生開書  
● 歩抄  
● 報恩記  
● 法華問答  
● 淨土見聞集  
● 正信偈大意  
● 御一代開書  
● 實情記  
● 遠徳記  
● 反古表  
● 唯信抄  
● 後世物語  
● 一念多念分別事  
● 安心決定鈔  
● 附録  
● 願題  
● 索引

四大特色

● 輕便新裝 從來の聖教徒に粗大にて携帶に不便なりしを反し本書は嶄新堅牢なる洋裝に仕立られたる機上に備て體裁よく瀟車の中にて一寸讀むなぞ甚だ便利に心地よし  
● 句讀點附 假名がきの聖教も是を切つてなかりしかは却つて讀みにくかりしが今度は全文悉く細かに句讀點をつけたれば讀易きは勿論一讀其意を領解し得  
● 新編索引 澤山の御聖教一に就き製作者の來意、大意、年代、造主等を確に知るを得べし  
● 新案索引 且つ卷末に大須賀秀道師が苦心經營の餘案出されたる信仰、教義、處世等各

● 假名聖典は是の如くなら  
● 粗惡龐大にして携帶に不便なるもの最嶄新輕便の美本  
● 大革命は企つて聖教の舊式製本の徒に  
● 聖教持たぬ信者一人もなきに  
● 珠數佛壇よりも先づ持つへきは本書なり

法藏館 東京六條中珠數屋町 (電話二二五八番) 豫約申込所

法藏館 東京六條中珠數屋町 (電話二二五八番) 豫約申込所

▲好評噴々 版第二回特減發賣 一日を遅るれば 初版旬日に して賣切れ

加藤咄堂 編纂 訂改

# 而救大金

洋裝金字入 總クローヌ 全一冊 定價 一圓五拾錢 郵稅十五錢

## 特減

豫約申込期限十月卅一日迄前金を要す。製本出来期十一月十日必一期限後定 價に復す。

布教の必要 今日より急なるはなし。本書は古今東西實地應用せらるる演說教の資料を精選して撰す。應用自在の演說教は忽ち組織せられざるはなき近來無比の好著なり。今更に嚴密に校訂し、この急に應用せられん事を期す。

- 詔勅 ● 佛敎 ● 和歌 ● 歌道 ● 俳句 ● 譬諭 ● 逸話 ● 婦女の鑑 ● 貴女敎
- 訓 ● 金言 ● 實錄 ● 部 ● 訓話 ● 禪話 ● 佳話 ● 格言 ● 西語 ● 酒脫 ● 滑稽 ● 他山の石 ● 戰時及戰後の
- 資料 ● 年表 ● 統計 ● 智識の庫 ● 家庭 ● 戰時及戰後の

看よ 如何に其材料の精選豊富にして用意の周到なるかを、書きに第刻下必須缺く可からざる書冊たるを證するに餘りある者にしに其厚意に上の完美なる書籍としたれば錦上更 寶典あり速に此の最新の材料を使用せられん事を期す。

筆主 加藤咄堂

## 二寶

本誌は一宗一派に偏せず教界に於ける唯一の「布教機關」にして好評噴々毎號發行部數三萬餘、毎號大家の講演を掲げ、文學、敎育、宗教、家庭に於ける好伴侶、教界に於ける本誌の呼聲！記事尤も最新、價格最廉、意匠最麗、優美、文書、布教に無比の一部郵稅共金二錢一ヶ年前金二十四錢、見本は往復はがきにて申込みを乞ふ。發行所は東京市飯倉町五丁目森江本店

光融館出版書は全國著名書店にあり

### 講義書類

- 織田得 法華經講義 三 定價三圓 郵稅二十錢
- 釋宗演 金剛經講義 三 定價二十錢 郵稅四錢
- 前田文 正信偈講義 四 定價十二錢 郵稅四錢
- 天桂祥 碧巖錄講義 四 定價二十錢 郵稅四錢
- 大内清 般若心經講義 八 定價十五錢 郵稅四錢
- 學村上文 因明學大意講義 二 定價四錢 郵稅四錢
- 織田得 八宗綱要講義 二 定價七錢 郵稅八錢
- 山田孝 坐禪用心記講義 三 定價二十錢 郵稅七錢
- 道師著 曹觀坐禪義講義 三 定價七錢 郵稅四錢
- 香月院 教行信證講義 三 定價三十錢 郵稅七錢
- 若生形 寒山詩講義 三 定價四十錢 郵稅六錢
- 山田孝 學道用心集講義 二 定價四錢 郵稅四錢
- 道師著 阿彌陀經講義 二 定價六錢 郵稅四錢
- 學博士 文殊阿彌陀經講義 二 定價六錢 郵稅四錢
- 圓師著 大菩提心論講義 二 定價十三錢 郵稅四錢

光融館出版書の外全國の佛書は取次販賣す

發兌元

東京神田駿河臺お茶の水角 電話本局二千九百九十九番

光融館

### 佛敎書類

- 齊藤唯 俱舍宗大意講義 二 定價四十錢 郵稅六錢
- 信師述 七十五法名目講義 二 定價四錢 郵稅四錢
- 織田得 大内清 碧巖錄 十 講義 三 定價四十錢 郵稅六錢
- 道師著 華嚴學葉講義 三 定價十六錢 郵稅四錢
- 藤谷還 原人論講義 八 定價廿五錢 郵稅四錢
- 大内清 維摩經講義 四 定價廿八錢 郵稅四錢
- 鳴地默 摩訶經講義 四 定價廿八錢 郵稅四錢
- 山田孝 禪門法語集 三 定價一圓四角 郵稅二圓二角
- 覺尾順 佛家人名辭書 新 定價廿七圓
- 織田得 白隱和尚全集 三 定價四十錢 郵稅六錢
- 藤大狂 一休和尚全集 三 定價四十錢 郵稅六錢
- 山田孝 佛敎のすゝめ 四 定價三十錢 郵稅四錢
- 道師著 大乘起信論義記 三 定價廿五錢 郵稅四錢
- 若生形 禪學 單刀直入 三 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 山田孝 正門 養禪話 三 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 後藤北 殺活自在 三 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 山田孝 殺活自在 三 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 道師著 殺活自在 三 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 山田孝 茶禪一味 二 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 樞師著 茶禪一味 二 定價二十五錢 郵稅特に不要
- 若生形 活禪談 第二集 五 定價各廿五錢 郵稅特に不要
- 山田孝 活禪談 第二集 五 定價各廿五錢 郵稅特に不要
- 有馬文 日本哲學要論 再 定價七十錢 郵稅八錢
- 學士著 日本哲學要論 再 定價七十錢 郵稅八錢
- 織田得 國文學 佛語解釋 定價一圓四角 郵稅四錢
- 能師著 十二種 佛語解釋 定價一圓四角 郵稅四錢
- 森大狂 東坡禪喜集 定價三十五錢 郵稅四錢
- 森大狂 居士分燈錄 定價三十五錢 郵稅四錢
- 織田得 和漢高僧傳 定價六十錢 郵稅六錢
- 能師著 和漢高僧傳 定價六十錢 郵稅六錢
- 村土博 大乘佛說論批判 再 定價七十錢 郵稅八錢
- 士著 大乘佛說論批判 再 定價七十錢 郵稅八錢
- 白隱禪 惛眼覺 再 定價八錢 郵稅二錢
- 師著 惛眼覺 再 定價八錢 郵稅二錢
- 若生形 森田悟由禪師法話集 定價八錢 郵稅二錢
- 山田孝 森田悟由禪師法話集 定價八錢 郵稅二錢
- 安部正 山岡鐵 武士道 六 定價卅五錢 郵稅四錢
- 人編纂 舟居士 武士道 六 定價卅五錢 郵稅四錢



前號要目

求道

◎信樂開發論

◎虛飾偽善

講話

◎心蓮開發

◎信仰は廣大勝解也

實驗

◎無我の實驗

▲信仰書翰二章

雜錄

◎喇嘛僧雜談

款咏

◎小園秋來

◎歸省雜詠

◎悼亡弟

時報

◎遊行日記

▲消息

左千夫

八風

一也

近角常觀

近角常觀

近角常觀

福高政澄

求道第二卷第八號 明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可 明治三十八年十月一日發行(毎月一回一日發行)